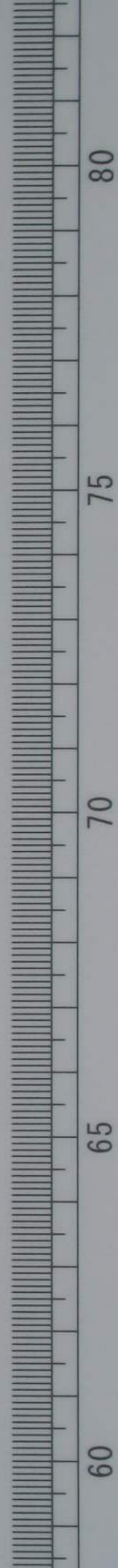


春

花

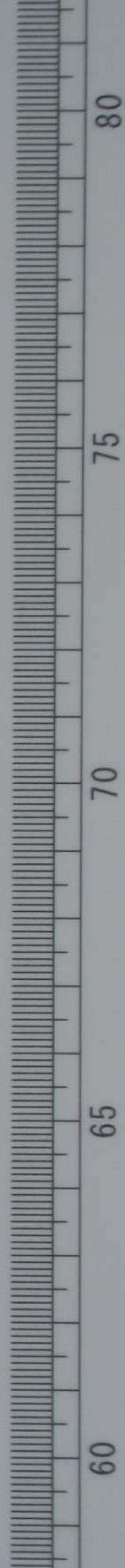
万葉



夏より
秋へ

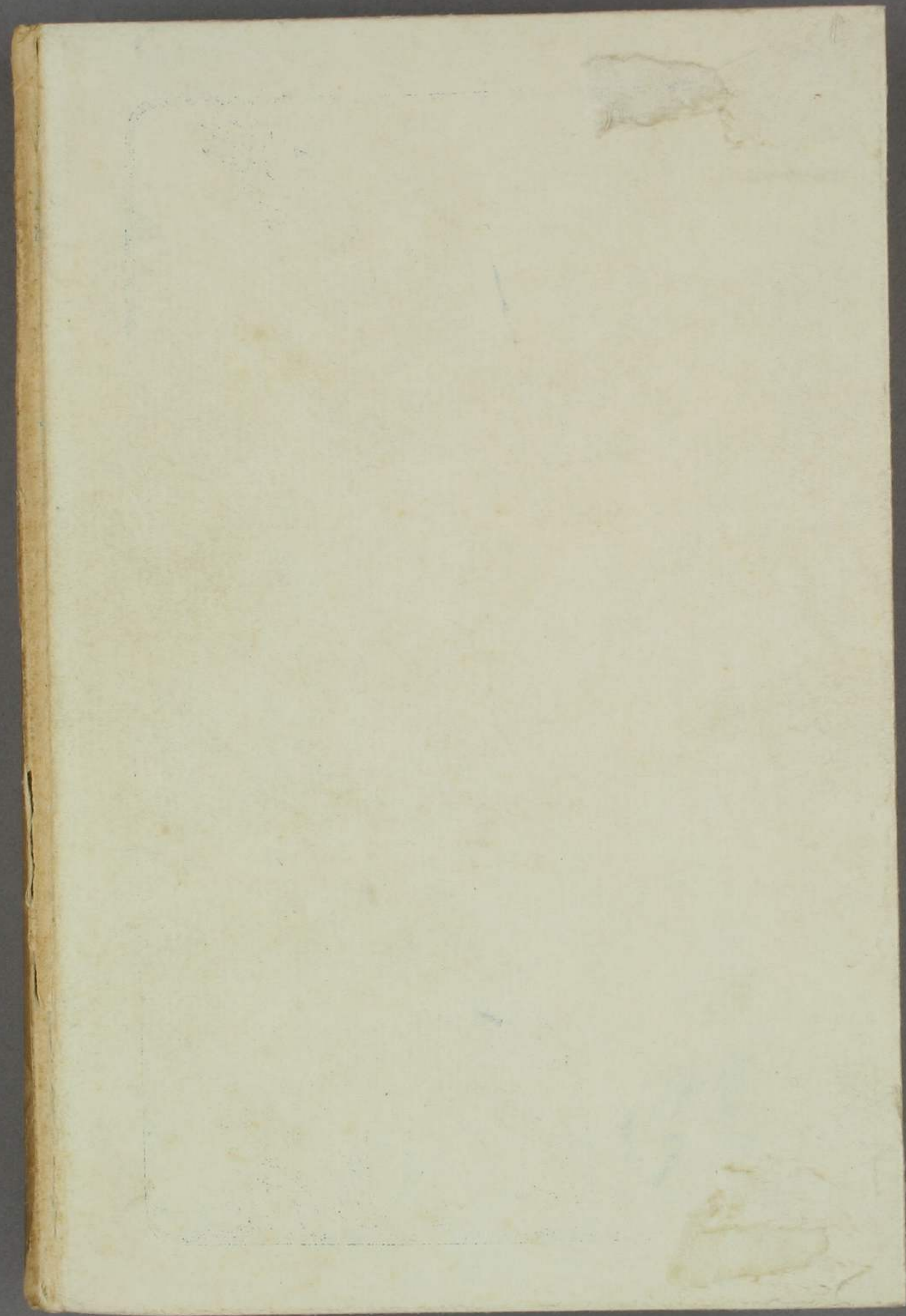
夏子素

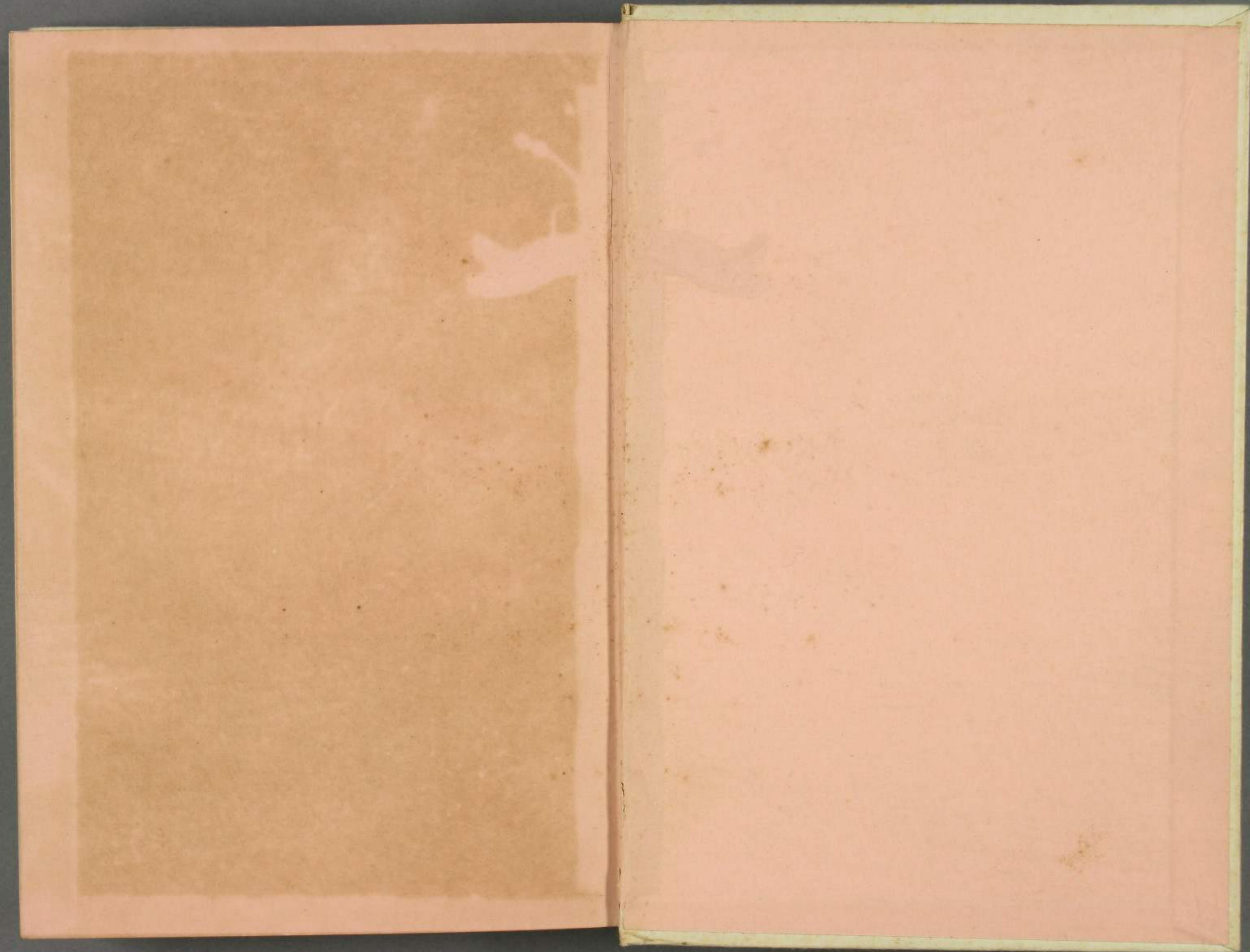




夏子の巻

夏子集





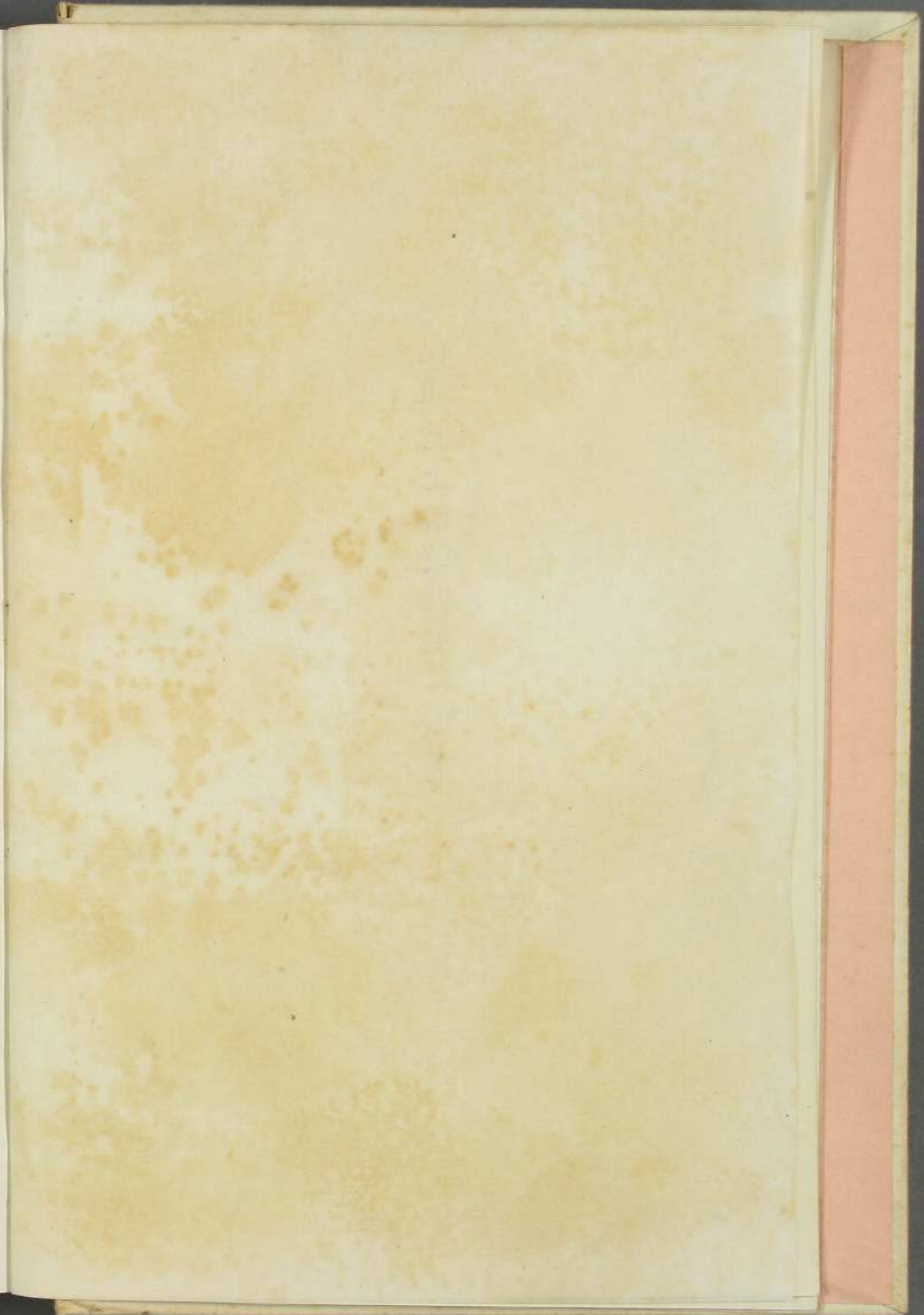
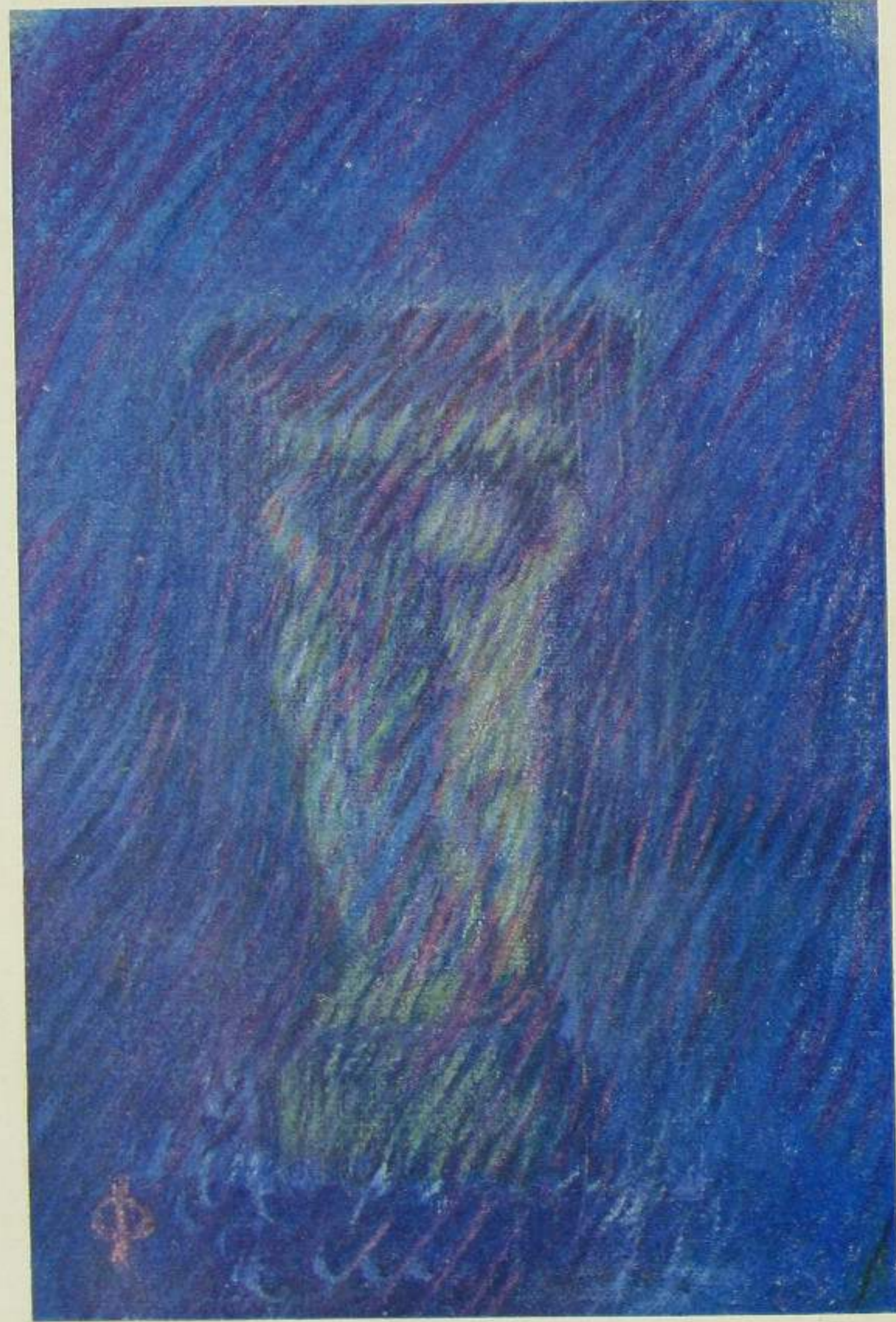




文學博士上田敏先生に獻ず。



文
學
理
士
生
田
村
俊
宗
之
遺
稿



夏より秋へ

與謝野晶子





琴の音に巨鐘のおとのうちまじるこの怪しさ
も胸のひびきぞ

人の世の掟の上のよきこともはたそれならぬ
よきこともせん

くろ髪かみの女をんなの族ぞろは疎うとけれどわが師しとなりぬ人
うらむ時とき

戀こひと云いふ紅あかき下した著著の上うへに著きるおらんだ染ぞめのも
の好ずきの夢ゆめ





御心みこころに突つき入いりし日ひのおもひ出でのなにか今日けふ
さへ潑はち漉らとせる

被かけものせんと心こころのすすむとき猿さるの頸くびにも眞まこと
珠たまをば掛かく

憶おぼ病びやうか蛇へびかくさりか知しらねどもまつはる故ゆゑに
涙なみだこぼるる

もの哀あはれ知しれる心こころは日ひのうちに春はるのかぜ吹ふく
秋あきの風かぜふく





君故にあまた樂しき時すぐし死ぬ日となりぬ
神もかしこし

むかしの日姉とおもひし櫻草いもうととして
君と培ふ

人々ばわが話にてしづまりぬ秋は斯かりと思
ふ夜かな

むつかしや何を願へる心ぞや云ふまでもなし
思はるること





わが門の二もと柳すこしづつ春めくころのあ
かつきの雨

わが閨にやがて丁字の匂ふ日の來らむなどと
他をおもへども

わがことを人みな賞めてありし時苦しかりし
に比ぶればよし

神田川その岸のまち霞まむと病めば都のうち
もなつかし





かへらんと更に思はずいにしへに前生の身に
君を見ぬ日に

こちよく分ち能はぬ酔をしぬ目の前のこと
いにしへのこと

わが息の虚空に散るも嬉しけれ年の明けたる
一日二日

あめつちの白地の春に少女子の遣羽子の音金
砂子おく





大ぞらにしろがね色の花ぶさの見ゆとも思ふ
春の來ること

しろ石もみどりの石も美しくしく春日の神の口
づけを受く

手弱女がましろに匂ふ手を上げて賞むべき春
となりにけらしな

不可思議のよもあらじとて入りも來し女の心
の臟ならめ君





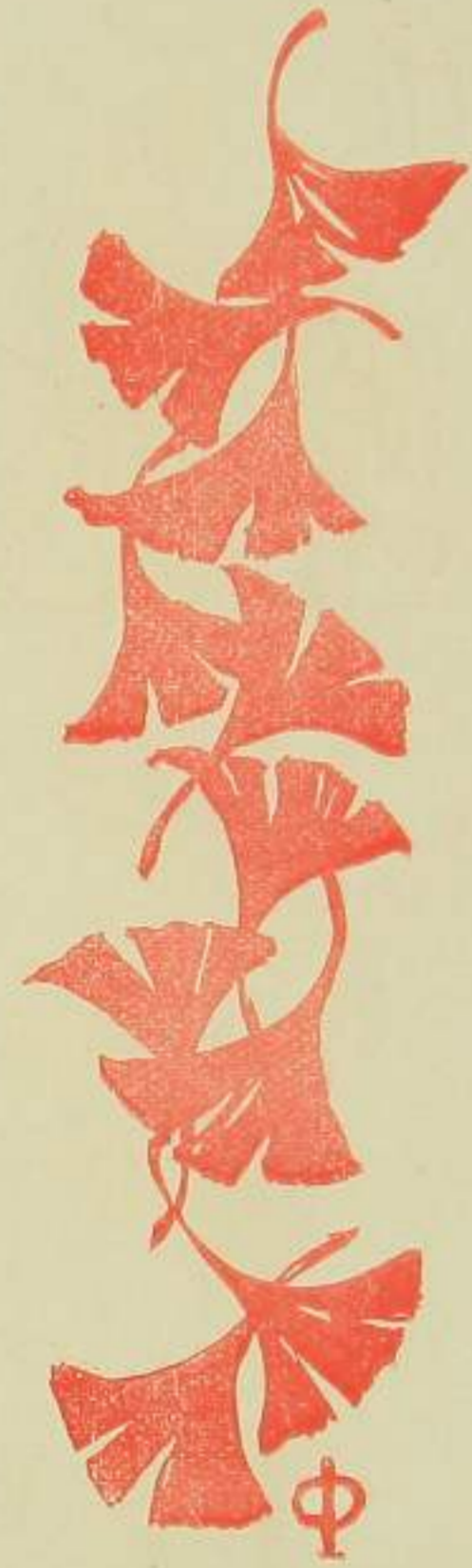
鏡には何をとどむる不幸なる女王のゆめと帝
王のゆめ

君とまた再會すべき家としてしげるをめづる
いちじくの葉よ

二月や怒をちびし丹はなだの雲のうかびて霞
ふるかな

清淨につゆよこしまのなきものに彼の日の戀
もなりて終りぬ





わが知らぬことに喜ぶ群はなれ再びもとの片
隅に行く

わが君を深くうらむは危ふかりかたちのいま
だおとろへぬため

くろ髪やまだあざけりの心もて春に會はぬを
よろこべる人

青き火に捲かると云はる戀すれば泉下の人の
魂に似るらむ





涙^{なみだ}しぬ今^{いま}人^{ひと}のごと戀^{こひ}と云^いふ生^い死^じのたね蒔^まきし
こここに

何^{なに}やらの上^{うへ}に載^のせたる鍋^{なべ}見^みゆる秋^{あき}風^{かぜ}の日^ひの君^{きみ}
が家^{いへ}かな

紅^{こう}梅^{ばい}に地^ぢ獄^{ごく}繪^えのごと赤^{あか}黒^{くろ}く入^い日^ひのさせばいさ
どほろしさ

朝^{あさ}夕^{ゆふ}かたはらに笑^{あは}む櫻^{さくら}草^{くさ}はたかたはらに泣^なく
さくら草





ほのかにも白さけものの尾を振りぬ動物園の
朝靄の中

わが子の目うるみてやがて隠れたる障子のそ
とに春の雨ふる

人の世は貧しき心もちたるもわれの如きもお
なじ戀する

いさかひてはては涙もながしけりこれを寒し
と更におもはず





よく知りぬ次の刹那に自らを笑はしむべきあ
りのすさびと

戀をして趣のなき終をばめでざる人のふとこ
ろの劔

浅みどり柳の枝の中行ける紺のきもの春の
夕ぐれ

三月の柳を折りてあまりにも物をかくさぬ風
流男を打つ





佐保姫にしら玉姫におないどし去年も今年も
來ん年もまた

見ることであへてせざるはこの人も彼も弱さ
の同じければぞ

うら庭の千日紅を血まみれの花と忌むなり物
に怖れて

いと寒くかなしきままに明るみへすべり入る
なり我が朝の夢





わが吐くは瀕死の息と思ふかな白くかぼそく
深く苦しう

一人のわれに答ふるものも無し下部の如き面
そむけつつ

たゆめれば日の仰がれず紫の幕に隠れて又出
でずわれ

地をまろぶ落葉にまじりらうたしや山より來
る鳥の足音





かにかくに我身や人と異なるこの賑やかさこの寂しさよ

人おもふ涙は紅き絹となりひるがへるなりわが前の爐に

灰色のあはれなる顔する群はうたへる日なく舞へることなし

この君につけて物のみ思はると云ふ下心はかなまらず身を





筆をもてあらがひかくす秘言もみならつくし
やこの君のこと

わが涙重きおもひをする日より戀しなど云ふ
唯事に落つ

夜となればをはりの近さ知ると云ふ朝は若さ
を見よとわれ云ふ

硝薬のほひくすぶるこちしてわが黒髪の
こちわろき日





松原の鶺鴒のつばさのさにづらひ日昇るらしも
大わたつみに

春の水あふるる音を何よりも悲しとおもふ我
に似たれば



少女等が白ちりめんを糸に縫ひつくり出せる
驢馬とおもひぬ
わが見し日戀にやはられ來しと云ふ乞食に君
は過ぎざりしかな



ことよろづ若き心こころにまかす人我等われらが末すゑぞあは
れならまし

そよ風かぜの春はるのあかつきとらへ来て我われに這ははせ
よ水みづいろの雲くも

青柳あやなぎあなづり初はじめて目めにおかぬ三日みか目の小こ雨さめ
髪かみに沁しむかな

戀こひと云いふ欲ほのみ生きて自みづからと云いふたのもしき
ものは死しに行ゆく





花の草しろき紫おなじ程さびしきいろをつく
るたそがれ

與へずば奪はんかくと叫びたる荒き力もゆる
む日のきぬ



酒なるか劇毒なるかみづからを生ある限り吸
はまほしけれ

ことわりに心ぐるしと思へるは皆外ならぬみ
づからのこと



うるさしや小鳥の話あかずする客人早く鳥と
なれかし

大いなる赤き舌吐くころよき魔を傍らにし
てまし夕ゆふべ



磯はまの貝の紋をば見るごとく石の上這ふ春
のかげろふ

この君は河に小川の入りたりし戀とことわる
そのかみのため



人とする話を避けて與之助がまぼろしつくる
山ざくら花

ほのかなる遠山の色うち見つつ思へる時に
もふ君きぬ

なほいまだもの落しつる心のみゆめもならば
ずわが戀の上

ほのじろき李の花に降る雨も見て心燃ゆ人を
戀ふれば





西の京浪華の街の思はるる霨の降る日となり
にけるかな

いにしへの奈良の御寺の内陣を歩む心地に臘
梅を嗅ぐ

戀はしもこの人の世にゆくりなくわがやとひ
たる船とこそ思へ

久方の日の光よりたふとしと片戀をだに思へ
るものを





わがつくる諸善諸悪のみなもとをかへすがへ
すもすこやかにせん
春きたり遠方人に文書くと少女にかへり手な
らひぞする

おほらかに大寺めきて煙曳くわが春の日の磁
の香爐かな

よろこびぬ浮彫したるきよらなるうす桃色の
春の初めを





南風けうとく吹きしのちに降る三月の雨涙の
ごとし

そのむかし人と戀とに別ありき衰へぬれば相
ぞとぶらふ

心いとめてたき人の常なれば女王とよびてあ
なぐらに居る

いそのかみよくかくるへて書きしにも劣らぬ
ことを思へばぞ書く





自^{みづか}らの心^{こころ}に我^{われ}れとことわりををしふる時^{とき}の苦^{くるしみ}
さあぢはひ

険^{けん}しさとやはらかさとをもてること自^{みづか}らわれ
をいたましめつつ

いつよりか我^{われ}やわが身^みをうとみけんかく思^{おも}ふ
時^{とき}涙^{なみだ}こぼるる

むかしより心^{こころ}の奥^{おく}に流^{なが}れたる冷^{つめた}き水^{みづ}につひに
おぼるる





水色の寢間著のままにすを通る十疊の間の大
鏡かな

初夏の夕ぐれの庭わが前をかずも知られずし
ら玉はしる

野やしろの石のこまいぬそのもとのあたたか
かりし馬ごやしかな

水に居る身ぞとおもへりわが梳ける髪の前な
るうす青の雲





ものは皆いづちともなく消ゆるもの忘るるもの
と知りてはかなし

くれなゐと思へる胸に灰色の塔いつの間に建
てられにけん



わが心はからざりけるめぐりあひするごと時
に馴れぬもの見る

人間のうつくしさをば自らによりて思ひし日
も薄れ去る



家のうちうす暗き日もあてやかに白きめてた
き雛の顔かな

小ゆるぎの磯のあわびを人くれぬ上巳の雛の
大みさかなに

自らのこころの臓は人の飼ふ鳩と思へり生れ
し日より

若き日の戀ゆる書きしもの反古積みかさぬ
ればかくれ家となる





盡くるなき慢心のためおとろへずこの毒酒こそ
そやさしかりけれ

よそほひに假に建てたる圓柱ならずとわれの
戀を云はまし

若き人そこはかとなく集りて夜は何かたるわ
がこと語る

うすものの夏も寒げに見ゆるまで瘦せたる人
となりにけるかな





死ぬ夢と刺したる夢と逢ふ夢とこれごとごと
く君に關る

春の宵一人ばかりは悲しげに涙こぼさん人も
來よかし

さばかりも戀を頼めるあどなさは呪咀にまさ
ると誰の云ふらん

くろんぼの男と女まじり居るこちす花と葉
おほき椿





わが障子あさみどりなる絹を張りぬ白き雨な
ど注がせてまし

あとさきに嶋田に結へる人と我れ雨の後なる
水たまり越ゆ

道のべに唯並ぶ木と自らをわが思ふこといつ
の日よりぞ

われいまだ人を娶りしことあらず君の心をい
かて知らまし





あはれにも戀を見ぬ世の天となしいく日の
ちに地獄にぞ置く

いささかのゆかりなきこと身を噛みぬこれを
妬みと云ふや云はずや

目もすがら石を叩けり我よりも愁はしげなる
秋の雨かな

來し方をけものの跡と行くさきを己が路とし
見る如しわれ





外にまた似るもの無しと思ひたる高さ愁にや
や近し秋

眞白なる涙をおとす役濟みてまぶた開けば春
の日となる

わが話さけば心のやはらぐと言ふ酒好の友の
白髪

まじものは數行の文字を見入ること久しき時
により來りける





われ生いきん再ふたび見みじとおなじことあまたたび
云いふ善ぜん人にんのため

もの云いひてうしる暗くらさを心こころ知るこのおもむき
の忘わすられぬかな

つれなくもせせら笑わらひの聲こゑたてて夜よ通とほし爆はぜ
ぬうしや爐ろの炭すす

危あやふかることし盡つくせる魔ま術じゆつ師しを賞あめ合あふごと
しいさかひの後のち





船の帆の海に浮く如わが欲のいとさやかに命
にぞ浮く

なつかしく靄引く朝は切厩も森の如くにも
深く見ゆ

涙おつ吾れの心にそだちける眞白き鳥の羽を
振る時

思ふこと半夜にいたり忘れんと道理のままの
眠りに就きぬ





自らにへつらふ人にいくばくもことならぬ子
のもの諫めする

百日ほど飛行したりしそののちの氣落のごと
し今癒えぬべし

春寒しわがすがれたる姿をば旅役者ぞとおと
しめて泣く

わが子等がおしろいをもて青桐の幹に字かけ
ばうぐひすの啼く





夕風やすみれの海に浮島をつくる少女のまろ
き撫肩
夢に見ゆ阿片を吸へる赤き間の壁畫の中の廓
の女

春雨はまじへて降りぬ朱の夢さびしき人のし
ろがねの夢

尺すぎし萱の若芽のそれよりもかぼそき春の
雨に君來ぬ





夜の夢まぼろしのゆめ何ごともしも病めばかなし
や君あらぬ日に

戀ならぬ交り深しこのことばいと哀れにも初
めて思ふ

死ぬとせし目まひごちのうちにさへ一色な
らぬ心ぞと見し

何をする男女ぞわがことか白刃の背もて髪を
打たるる





口くちびるを吸すひに來くる時とき男をとここそ蛇じや體たいをなして空くら
翔かるなれ

さびしけれわが許ゆるす人ひとわれを見みて變へん化げのもの
と思おもはずなりぬ

樂たのしみを約やくせる人ひととなりたれど日ひの黒くろむことそれ
より起おこる

心こころには七なな八やち日かほど住すまはせつあざやかならぬ戀こひ
の片かたはし





おのづから忘草をば人摘まば別れしわれは何
となるらん

うつくしく危きことにいどむ群さくらの花に
風なわたりそ

梅咲きぬ十五のわれのいひなづけまた見る世
なし琴は弾けども

三輪の神アポロオの神おなじことしにくる神
のうるはしきかな





とこしへに見る日なきためわれ呼びぬ十の指
組みさんたまりやと

月の夜や盥に飼へる金魚の子ほの赤くしてこ
ほろぎの啼く

にくげなき例の心のくせなれば我をも戀ひん
人も戀ふらん

消息す憂きは死ぬ程戀しかる同じ心の變らざ
ること





廊^{りょう}などのあまり長^{なが}さを歩^{あゆ}むとき尼^{あま}のこちす
春^{はる}のくれがた

櫻^{さくら}草^{そう}白^{しろ}きうすでのさかづきに薬^{くすり}をつぎて守^{まも}る
かたはら

山^{やま}ざくら酒^{さか}屋^やの前^{まへ}に積^つみ上^あげし樽^{たる}に乗^のるなる
春^{はる}の日^ひ輪^{りん}

桃^{もも}色^{いろ}の春^{はる}かぜの吹^ふくこころより浄^{きよ}らなるなし
浮^うきたるはなし





春の夜の物語よりうすものうごく如くに心
はなりぬ

われさびし有情のもの相よりて生くる世界
の中に居ながら

なげかれぬいのちか戀か知らねども終りちか
づく心ならひに

朝夕におのれあやふく思へるは病める身より
も病みたる心





前に居て戀のこころをあかしする人形はやも
飽きられにけん

そこばくの幻ふせぐ楯として君この人を見つ
め給ふか

君の手かよそ人の手かくづしける君のまたな
くめで給ふ像

牧の艸パンの神きて大聲に笑へる日なり白き
雨降る





春寒し今日も男のしなさだめ怠らぬ身の時に
泣くごと

しろがねの燭臺ひとつ中に立ちしめやかなる
は三十路のころ

若き日はかるはずみごとなるもよし幸ありと
多く云へかし

しら鳥の船して銀の河ゆきぬ今日さへ我の威
ある心よ



世に怖ぢて思へる事は隠すとも美しくしさをば
いかがすべきぞ

自らをめでざるまでに到りぬとわれ見え透き
しいつはりを云ふ

朝の家われのけはひのなりたりとしるしを上
ぐる土のかげろふ

秋の日はさびし切なし部屋の棚あらゆる花を
もて飾れども





まぼろしに目に見ゆること少しづつ異りゆく
も哀れなるかな

戀人はやぶさかなるを第一の悪とささやきと
もに笑まへり

春の晝われかへり見て語ることありげに雨の
草に降るかな

薄青さかなしみ我す夜ごとにすいつちよの啼
く秋の來れば





こちよく打ちぢれたる髪見えぬ誰にかあら
ん秋のまぼろし

君がなすものに習ひき戀こそはたやすかりけ
れ得るも捨つるも

あめつちのうす墨の色春來れば塵も餘さず朱
に變り行く

おもしろき繪を描きやると子を呼びぬ正月の
來てなすことはこれ





庭にほに來くる鳶とびの頭かしらのはんてんの紺かんのにほひもよ
しや正月しょうがつ

わが見みつる十七じふしち八はちの正月しょうがつをよきこととして問と
ひ給たまふかな

何人なんびとも幸住さいはひすむと云いふことをうたがはず立たつ春はる
の戸口とぐちに

きよらにも薄桃うすもも色いろに眠ねりたる兒このけはひの春はる
の日ひとなる





あけぼのや雀かすめし山鳥血をこぼし行くう
まごやしかな

觸ること甚だ深さにもあらず夢にもあらず
この頃のこと

こころよき秋の日早く來れかし飽ける男のそ
の證見ん

夕ぐれの光に透さて動く人高樓にあり水色を
著る





小法師があちこちの房うち叩き聲づくりする
秋の朝かな

悲しさのこよなき事も知らぬなりわが衰へは
何に本づく

くろき雲たちまち散じたるやうに身をもてな
すも忘れんがため

忍び妻三日が程をかくまへと云ふ文きたる大
つごもりに





梅咲けば雁の羽色の壁などのものぎたなくも
見え初むるかな

わが足や踏みて走れるこちよく白雲の散る
月の夜の空



人はやく酔ひ給ふかなわが見つる海を語れば
戀を語れば

多きより多く戀する心をば路ゆき人にわれの
云はんや



おのが身のつな
がれし綱かみそり
をもて切る
ごとし初秋の風

たぐひなきめでた
さなりやわれ一人
日の出づ
るより入るまでを
見ぬ

しら玉はくろき袋
にかくれたりわが
啄木はあ
らずこの世に
(以下二首啄木の君を悲しみて)

死ぬまでもうら
はかなげにもの
云はぬつよき
人にて君ありし
かな





ものほしへ帆を見に出でし七八歳の男すがかの
我を思ひぬ

抱けるは唯ひとつなる戀ながらかひあるさま
に生涯を見ん

不覺なる君をば倒し少女子のわれを逃さぬ火
の鎌きたる

目に見えぬ不可思議國の手枷をば我れもはめ
らる若きならひに





こし方の語り難しやいかげん君こころみに
戀をやすめよ

戀の家さづきおこしぬ久方のしら雲の上けぶ
りの上に

草むらに鬱金のひと葉まじりたり透きとほり
たる秋風の中

口びるを押しあつるごとと桃いろの椿ちりさぬ
手のひらの上





戀と云ふ飛行の童まだ知らず岩室に居てくろ
髪を撫づ

もの欲しき心も知れる人なりとあさましがれ
ど甲斐のあらなく

桐の木きりの片側かたがは濡れて幹みき青あせきささらぎの雨あめなつ
かしきかな

おぼろげに心こころおかるる我われなりと君きみおもふ日を
つくらは憂うれし





樂音と秋風と聞きうつそ身のけづらるる如も
の思ふわれ

金色の雲のとざせる胸と云ひ戀のおのれを神
のごとくす

たらちねの石の御墓に黄なる粉をちらせし椿
かなしき椿

夕ぐもは戀のやまひをする人のうはごとくに似
てうつくしきかな





五月雨かびのにほひのする床に水のおと聞く
ふるさとの家

懲さんとこぶしを赤くしたる人二人行くなる
夕月夜かな

くらがりに縛められて心云ふ安かりし世のあ
たひ無さなど

わが心たからの櫃にをさめたるものと偽るは
ふらかしつ





戀ゆゑに理をうしなひてある人も皆かばかり
にものやかなしき

知る子みな懺悔をもたずあやまちはわづかに
て止むものと思へり

人群れて黒き林を眺め居し夕の里の目に消え
ぬかな

うばたまの夜にあかつきに夕暮に哀れなりけ
り秋の物おと





つむじ風捲きてかたへに運びきぬいと遠やかに
思へりしもの

一人のわれを貫き人の世と天とは通ずおもしろ
きかな



本を読み流行の衣を欲しがりし娘も思ふふる
さとのこと

欲しがりしだんだら染もうづまきの模様も舊
りぬ忍びて笑ふ



匂ひする春の空より落ちきたり我を照すと思ふ
 小鏡

俯伏して聞に物書くすざびごととして憎からず
 黒髪の人

南風吹きあほる日はすさまじき老女の手見ゆ
 春の日ながら

南宗寺大安寺いと尊かりこれらの寺のあかつ
 きの門
 (生れたる地の堺にて)





はかなきは戀こひすることのつたなさの昔むかしも今いまも
ことならぬこと

人ひと語る生うまれながらにめしひなる童子どうじにもものを
をしふる如ごとく

鶴つるとびぬ波打なみ際の砂すなふみて春はるくることを君きみと
語かたれば

人ひと來きたりまたなき彩繪さいえなりと云いふまだはかなか
る三さん十じゅう年ねんを





夢に見し人とおなじき戀人を見るときと春は前
にひらけぬ

手をのべて三月を呼び口びるを吸へと出して
かの四月待つ

雨ののち棕櫚の廣葉のみどり葉に紅梅うつる
春ともなりぬ

波のうへ三月の日の落つるまま紅のさうびの
花びらぞ散る





大きなる濕れる都かく思ふ春の夕のわが胸の
うち

聞出でて曉ちかきわたつみの潮の音を聞く圓
柱かな

春と戀力づけよと若き日のわがたましひに目
くばせぞする

あてやかに華奢にましろき波をもて水草洗ふ
あかつきの風





戀こひならば自然しぜんに寄よらむ人ひと一人ひとり來こよと招まねくはか
ららくりに似にる

わが祖そ母ぼのこれを初はじめに寺てらの門もんくぐれと撫なで
ししふり分わの髪かみ



わが祖母のこれと初めに寺の門ぐれと擲て
しんり翁の
あぐりに似る
無常なる自然たるもの人へ人來よと擲く



自^{みづか}らの心^{こころ}のごとくいちじろし金^{かな}錆^{さび}色のさびし
き胡^こ蝶^{てふ}

春^{はる}の目^めもたそがれ時^{とき}にしたしみぬ二^{ふた}十^{じゅう}の^ち人は
ものけのため





三味線の一の絃のみかき鳴し時雨通りぬ文書
ける時

夜となれば毒水を打つ神ありて身うちの痛む
われとおもひぬ

あら磯に唯ひと目見し白き鳥はた戀の君わが
夢はこれ

秒の間もあやまたずして逢ふと云ふ時に來ぬ
るも人とことなる



翅振りめぐりて飛びぬ黄の银杏ぬるでの紅葉
われも飛ばまし



一人の私物に君見んと欲の進みぬ何となるら
ん

非常なる罪障によりほのほもて身のつくられ
し人ならめわれ

あな冷た涙ぞ落つるしら菊は今日の後また獨
にて見じ





朝となり焔の夢を見る人も青き閨よりよるめ
きて立つ

すべからぬ事を手はせずしかもなほ持つべか
らざる心やらはず

初子をば持ちし頃より秋の日を悲しむ癖の附
きにけるかな

ふるさとは戀しけれども浦島の宮ならぬかと
訪はず七とせ





日出づれば生きものの皆ひんがしを禮拜する
も何のゆかりぞ

なつかしき君なき年の春に遇ふこの心より哀
れなる無し

しろき羽の小鳩の籠に温室の牡丹を切りてさ
しぬ早春

戀してふわれの心をこの君は下よりや見し上
よりや見し





身のあたり新あらたに心こころひくものはなべてあやふし
あぢきなきかな

人の云いふ正ただしからざる戀こひよりもまさまさに光ひかりを放はな
てるものを

わが小指せうさ琴ことをたたきて歌うたふらく紫摩しあ黄金わうごんの春はる
とこそなれ

君きみを戀こひひ夢ゆめまぼろしの中に居ゐて濡ぬせる筆ふでの書か
さちらすこと





まぼろしに岩より垂れしお納戸の袂など見ゆ
初秋の朝

な茂しそ心きのふと一昨日とまして此日と同じ
じからんや

あはれにも初戀のごと退きがたしと思ふほどの
君と知れども

わが時は失はれたり涙もて築きしものぞすべ
て流るる





枝えだにきて野の鴉からすなけば雨あめまじり八重やへのさくらの
薄うす赤あかく散ちる

まことには未いまだ死しぬべき憂うれひなく十とが一つひとに
髪かみほそりけり

いとくらしき夢ゆめとおぼえてあやしけれ鏡かがみの中なかの
やつれし女をんな

ともすれば世よにめでたかる人ひととして引ひかるる
人の戀こひのなしざま





この人を知りて多くの日を経つること忘れん
と思ひ立ちにき

尾を振りて浪を切り去る大いなる魚の姿は無
きかわが死に

華やかに初冬の風二側のたかき松をばうごか
して行く

まぼろしの力を待てるやうなりしその相見る
日たちまちきたる





下町の浪華役者のうはさなど人來てすればう
ぐひすの啼く

三月のみどりの空の眞下なる磯のなぎさの魚
の生皮

身に熱をおぼゆる人は生ぐさき血けぶりのご
とおもふ春雨

春の雨ばらの芽に降りニコライへ明神の鳩遊
びにぞ來る



大いなる濁れる川を赤き帆の船上りきぬ病める夜の夢



みづからの明方よりのおもひごとと知れりと床のさくら草云ふ

うらみつつ泣きつつ戀を心をばにび色に染め青色に染め

何ごとを忍び居たりし毛ごろもの一つ足らぬを求め難さを





君が戀やがておのれの血となりて再生の日を
早くせしかな

病ゆる身のおとろへて見る夢と白さの似たる
木蓮の花

つかの間も萬人の目のはなれざる身の苦しさに
驕慢の湧く

なほおのれ口ごもりがちにもの云ふもうらは
かなしや人に交りて





やみがたき苦と樂みを一にしてある生涯のあ
 わただしけれ

木の中の灰色の屋根たそがれにものおもふら
 し灰色の屋根

罌粟咲きぬさびしき白と火の色とならべてわ
 れを悲しくぞする

百合の花青みて咲けばわが心ほのかに染みぬ
 ものの哀れに





夏來ればすべて目を開く鏡見て人に勝るとす
るもこれより

あさみどり楓の木をば来てゆする夜明の風に
まじれり胡蝶

わが子等の青芝走りたづねよる兎の目にも夏の
句ひぬ

わが皐月今年兒のため縫ひおろす白き衣のこ
こちよきかな





わが思ふ人にならべて見るものか華奢に艶め
く初夏の風

白き砂海にすべりて入る如き夜の遠方の山ほ
ととぎす



ほととぎす夏山の吐く息づかひものもなげな
るその息づかひ
ほととぎす曉方近きわが山の上の空をば小車
はしる



上敷の新しき香に夏ごころ親しむ夜のほととぎすかな

ほととぎす夜の黒板を打つものか強き音はたかすかなる音



いなづまの幾筋の火をはるかにも見下す山の夜のほととぎす

ほととぎす既に餘さず君とわれかづらの徑を湖に行く



山に居て細る指などうちながめもの思ふ時ほととぎす啼く

六月は犯せる罪のかなしさのごと雨つづき杜鵑しば啼く

ゆく水も鳴りわななきぬほととぎす啼くとて君に寄りそへる時

ほととぎす半夜を寝ぬわが癖のこの頃となり人に知られぬ





ほととぎす谷の青葉のくらきをば覗きてあり
ぬ冷き岩に

ほととぎす針金を擦る工夫よと憂き寢覺ゆる
後言する

船に居て青き水よりいづる月見しこちする
うす黄の薔薇

大きなる日の落つるなど見れば憂し思ひ上れ
るわが心から



世にあるも恩を荷へるこ
こちしぬ女人の身こ
そはかなかりけれ



われ守る神を忘るる日
のありと懺悔をすれば
彼もしか云ふ

わが指の白き爪ほど日
のおちぬ君と語れるく
さむらの蔭

誰れの手か心に來りく
まどりぬと云ふばかり
の戀物語





戀ゆゑに人屑のごと見下す日われにありとは
思ひ及ばじ

憎氣なきのこぎりの音うぐひすの聲にまじり
ぬ聞いづる頃

石像のしろき足もと夕ぐれの白き足もと春の
足もと

おかれしは泉のもとか火の中かよそよりわれ
の見まく欲しけれ





春の雨障子あくればわが部屋の煙草のけぶり
散りまじるかな

唯の日もいけにへ者の死ぬ時に云ふごときこ
と思へる人ぞ

心より煙の立つと云ふことを二三日病みて知
れる人かな

こちよくわれよりもの流るるを戀の日に
知り春の日に知る





木瓜の花馬のわきばら置きたると石をおもひ
ぬ春の夕ぐれ

かなしくもこの木の質は烏羽玉の夜に花咲き
白日に散る

ふと気づく夕とわれの戀仲はみづみづしかり
君も及ばず

戀すれば間近にももの色かはるおもむきを知
るおもむきに觸る





いとにくしさとぞひらめくわが心呼べど呼べ
 ども答へぬ心

ひろびろと心の川のかがやける日なりと君に
 女かく我れは

美しくしき言葉断たずば耳貸さん鸚鵡かあらず
 傍の男

われは憂し生れながらにまぼろしをうちとも
 なへる眼と思ふかな





ひと時

入日する雲の明りに遠方の塔の尖見え黄ばむ

咀はれて咲かぬ蕾の残れるをわが胸に見ぬ一
つなれども

ちさきもの喜びあひて手を振ると思ふ櫻の花
の上の雨

わが船の寄らんとしつる島消えぬよしやあし
やと驚かねども





ため息をつくならはしも好しと云ふまた類ひ
なきなさけ人かな

しめやかに思ひあまれる息をして柳のおくに
上りくる月

海見るに白き小舟のただよへる二町がほどを
好みぬ我れは

木瓜の花みだりに紅の封蠟を紙にこぼせば戀
ごこちする





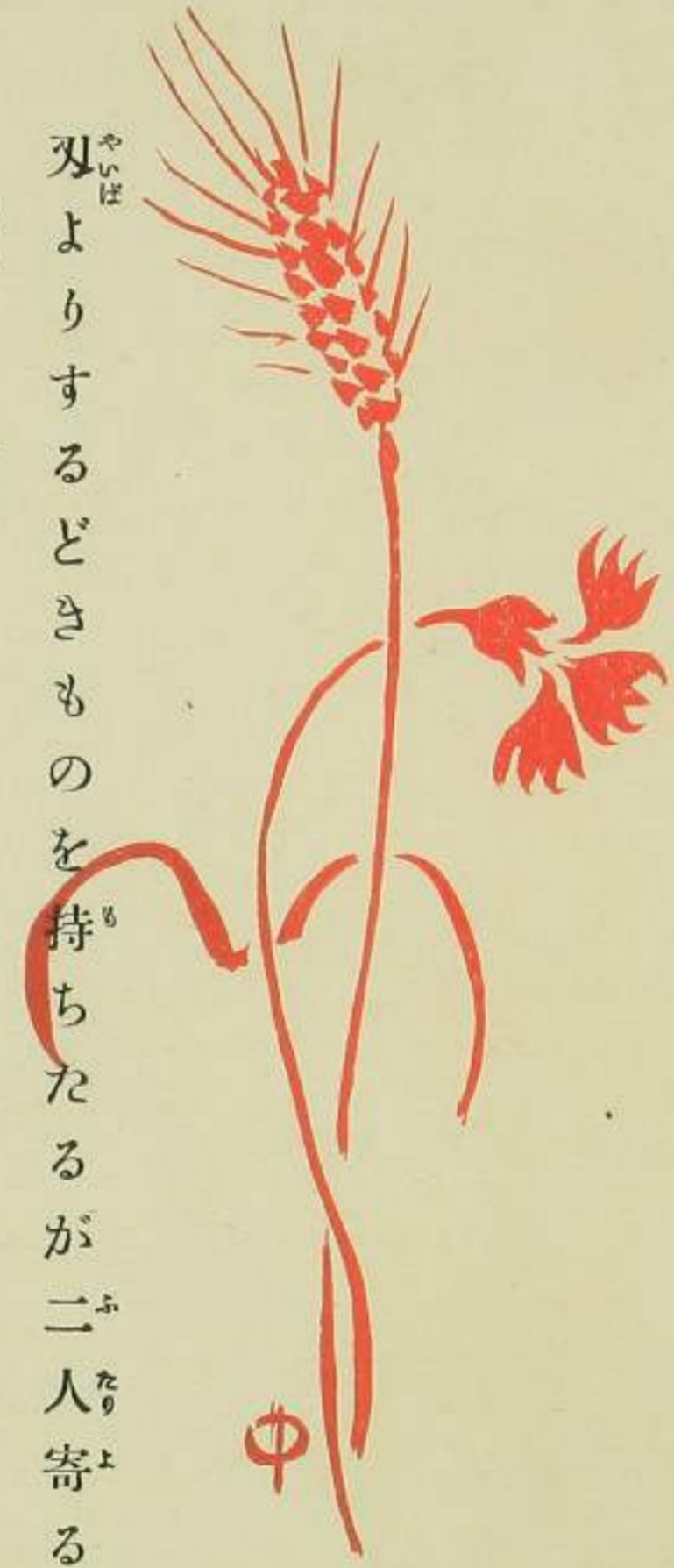
いみじかる春の世界に寒き洞ひとつ作りてわ
が心おく

なほおのれ君のためには耳かさん手は君のた
め琴をとりつつ

遠方の人の戀とも心とも木の芽ほのかに萌え
出づるかな

うすものの襞の間に遊ぶ夢見るとおもへり君
と語るを





刃やいばよりするどきものを持もちたるが二人ふたり寄よるを
ば危あやふくぞ思おもふ

たかぶれる心こころの上に匍はひかかる灰は色の謁いいか
にしてまし



來こし方かたのなげき未み來らいのおそれごと皆みな持もちなが
ら今いまをよろこぶ

わが指ゆびを嚙かまんとするや哀あはれなる女をんなは人ひとを刺さ
すが難かたさに



み心は青空となりわが指にほぐらす細き絹糸
となる

青ざめし鏡の中の人なるか花めく戀を作るお
のれか

目に見えぬ疵あまたある心ゆる終に戀より離
れがたかり

湯氣のする軽きふるへのなまめかし裸のわれ
の身をばめぐりて





くろ髪や前うしろよりめでたかる春の世界ぞ
われにも云ふ

ほつほつと麥の青めるところより風の吹きく
るわが湯殿かな

根をはなち針にさしても咲くものは春のさく
らと若きころと

戀と死とくらぶることは苦しけれ誰も病みて
はかくまどふらん





わが心いかなる芽をもち枯すわろき土とも
思ひ知りにき

憎からぬ音をも立てて二月のあられ打つなり
青桐の幹

雨雲の墨を流せる空の色さむからずして紅梅
の散る

しら梅や日の入り果てて後歸るわが門のうち
一町がほど



春の晝梯子の口に手を打てばこだまするなり
桃色の壁



終りまで唯あさはかに自らをもてはやすより
知らぬ身ならん

わが家の石の浴槽に浅みどり柳の枝のうつる
春かな

おぼつかなおもはく深きたましひは今日も離
れずありやあらずや





一生はさんたままりやの繪のやうに金粉をも
てぬられずもがな

あめつちの中に休まず遊事する小きもの美しく
しきかな

君にまた他人につけて我こころあまりに優し
あやまちや見ん

わが歌は皁月におつる霞ならん時をわすれて
さむき音かな





思へらく死ぬなどと云ふ唯ごとくに代へて許さ
じその二どころ

灯ともれば我ぞ出で行くはしきやし君とある
をば息づまるとて

衰へぬものの因果をことのほか驚かぬ子と見
ば見えぬらむ

奈落までともに落ちにき天上に翅ならぶると
異らねども





うす紅き障子のあかりそのそとに棕櫚の葉の
鳴り心かなしき

二日三日君を恨みぬ七月のそよ風吹けどなく
さまぬほど

日記をしも初めて附けて君がことわがこと書
くを哀れとぞ思ふ

ふと思ふ花市のある廣場より古き御寺の塔を
見しこと



ある時のよしなしごとを恨む時もてはやすとも聞き給ふかな



身を曲げてうすぐらがり縁に居ぬ懺悔など云ふこともしてまし

戀すれば日に三度死に三度生くこのおもむきのあわただしさよ

この人は懲し得たりとことほぎぬ心を犬か兎のやうに





水だまりおもちやの赤き金魚浮き雨がへる飛
び日の暮れて行く

山の鳩木立の奥に動くとき灰色もいとなつか
しきかな

見がたしとアカシヤの葉の射す窓をわが戀ひ
居れば夕風ぞ吹く

寒き日も二階の障子あけはなち部屋のまなか
にものを思へる





わがしつる傷と思ひしかのこをなつかしむ
日となりけるかな

夏來れば我れ何ものも悲しかる目して見るな
り親しきがため

けふの世に歩み入りける日の初めかすかに見
ゆるひなげしの花

あなさびし思ふことなしかく歎き文多く書く
女となりぬ





悲しくもわれ頼まれぬ性もつとある夜の夢の
後におもひき

君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり小
糠雨ふる

草踏みて草履のしめるこちさへ嬉しき夏と
なりにけるかな

こちたくも本を置きたる戸棚よりさびしさの
湧く黄昏の部屋





文書くを四五日ののち怠りぬあぢきなきかな
かかるおもひで

焼けて死ぬ身をうたがはず氷さへわれに來れば
火のこちしぬ

夏木立青きが上に夕雲のいく色となく下る遠
かた

旅すれば國國に吹く風の香もわれ嗅ぎわけぬ
哀れなるかな





戀もすと願へることの中程に交せて語れば人
皆わらふ

居て
巴里なる踊場の夜の話など男と語るしら砂に

歌詠めと馬に乗りたる使來ぬ湖めぐりかへり
來れば

病める晝起き上りたる間の中に人のあらぬは
悲しかりけり





わが閨のましろき麻のふすまより十二時頃の
月は出でけん

筆置きて夕立降れば見に出でぬ四谷の濠に並
ぶ柳を

あかつきや川にもまさり清らなる草の中なる
白き道かな

石竹に水遣る啞の園丁と近くわがある夕月の
もと





いと はやく 虫の 鳴く 夜となり にけり この 二日
三日 あぢき なし われ

この 夏は 金蓮 などの 匍ふ 土に すでに 虫鳴く か
なし きかな や

起きい てて 小鯛の 網を 見る 頃の 濱の 宿屋の し
ろき 電燈

わが 閨の 白き 簾と 朝の 雲風 に 吹か れて うらが
なし けれ



扇^{あふぎ}などもてあそびつつもの思^{おも}ふ秋^{あき}いと近^{ちか}くな
りにけらしな



噴^{ふん}水の白^{しろ}き石^{いし}見て秋^{あき}來^きぬと都^{みやこ}の少^{せう}女^{にょ}うちもお
どろく

うつくしと白^{しろ}き衣^{ころも}の脰^{うで}ほめぬわが妹^{いもうと}は姉^{あね}をあ
がめて

たぐひなき悪^{あく}夢^むを見^みつるこの君^{きみ}はやがて覺^さめ
ずもなりにけるかな (以下三首前田翠溪の君を弔ひて)





この君は何をたのみし妻か子かなしけれど
も一まきの歌

天地もかなしかりけり若き子の死にたる後の
歌におもへば

物干へ帆を見にいでし七八歳の男姿のわれを
おもひぬ

うつくしき素足の冬の來りけりちらほらと咲
く水仙の花





亡^なき姉^{あね}の腰^{こし}のかたちと指^{ゆび}先の^{さき}爪^{つめ}の色^{いろ}のみなほ
知^しれりわれ

あ^あくま^までも火^ひは慄^{おそ}へりと爐^ろの前^{まへ}に涙^{なみだ}ながして
思^{おも}へるはわれ

あ^あかつ^つきの樓^{ろう}の下^{した}なる長^{なが}き路^{みち}風^{かぜ}と小^こ雨^{あめ}とだん
だ^だらに吹^ふく

四^よ辻^{つじ}の易^{やす}者^{もの}に行^ゆき尋^{たず}ぬらくおよそこれより衰^{おとろ}
へぬかと





戀の味酢に似たりとぞひとり居は水のごとくに味の無しとぞ

わが心の臓に通りてまだ覺めず酒も飲手もよきはめでたし

味氣なく赤きとんぼを見送りしある夏の日の阪の中ほど

いのちなど更に死ぬまじかくとさへ喜べる身はつねに思へり





われなどがかたへに寄らば涙ぐむ鳥はあらぬ
か歌ふ小鳥は

思はれておのれありしと知ることの七八年ほど
おそかりしかな

をりふしにそぞろなることする病うとましと
なしなつかしとなす

われを見てあなめでたやと云ふもあり物を知
れるや物を知らぬや





思はると聞きてさながら戀のごと身をふるま
ふははづかしきかな

三年ほどもて煩らはれありし人何時より君に
うち勝ちにけん

うば玉の夜に至れば泣くことを樂みにしぬ少
女なりし日

白き火の降るかわれらの戀なるか夕立の雨こ
こちよきかな





野の道の後に川のあるこちるとささやく
月に歩みて

初秋の板の廊下を歩む時山のあはひを行くこ
こちしぬ

ひとり居に秋風吹けば悲しかり濃さくれなる
の窓掛のはし

わが病める小床を置きし疊よりまた寒きもの
あらじとぞ思ふ





初秋の第一の日と云ふこち俄かに覺え君に
文かく

われめでぬ愛と悟をよき程に見せたるものを
秋の世として

露おきぬ物思ふ日に隣りたる味氣なき日と思
ふ秋かな

露おける蓬を踏むと出づる時涙ぐみぬるくる
髪の人



秋風の吹く暮れ方にちされ飛ぶ雲とならまし
君をわすれて



秋來る今新しく湧きいづる水のあるらし大空
にして

わが机旅よりとある消息を二つ三つ置きて秋
立ちにけり

みだらにも鶏頭の花土に咲き白犬眠り秋の風
吹く





あかつきの鳥の羽音のいとはしくなりつる日
より山を降りきぬ

客人の若き男のわらひ聲まじるもよしや初秋
の風

我友の背高き人と低き人つれ立ちて來ぬ秋風
の門

わが歌ふ日となりけらしはしきやし圓葉の柳
秋風に立つ





桐の葉と松の間に秋の空少し見出でて胸騒ぐ
かな

ふるさとの海邊の秋の砂の丘くづるる雨のあ
かつきに降る

亂れ飛ぶ赤あきつより二つ三つ泣くほどのこ
と思ひ出でにし

夕ぐれの砂の上をば小走りに秋の風行く静心
なし





初秋の風に伴ふはなだ色見ゆれ小指のふるるところに

ひるつかた霧晴れたれば見下しぬ梢の下の銀のながれを

何やかや多くの色の染みつさぬ初秋の日の女ごころに

窓に来てありのすさびにさぼてんの繪など描けども冷き日かな





快^{こころよ}く諸^{しよ}悪^{あく}の渦^{うず}の鳴^なるを聞^きけ我^{われ}をば問^とふは海^{うみ}を
問^とふなり

瑠^る璃^り色^{いろ}の空^{そら}に朱^{しゆ}を注^さす點^{てん}一^{ひと}つわが脣^{くちびる}と日^ひと似^に
たるかな

わが戀^{こひ}は巖^{いわは}の中^{なか}にありとなし見^みずてあるべし
おとろへぬため

衰^{おとろ}へしものならなくにさは何^{なに}ぞ遊^{あそ}びつかれし
一^{ひと}ときの身^みぞ





聞くはよし牛の聲する蛙居て啼けば雨ふる嶋
の消息

秋くれば手に拾ひたる小石にも遠さいのちの
あるこちちする

二つほど夏の衣を重ね著て秋來と語るうれし
きこちち

古びぬとこの形なき心さへうちも悔るよから
ぬ人は





身じろがは刺さんと脅す白刃こそ秋なれ佗し
いかにしてまし

桐の葉を散るに先だち朽ちさせぬいとわりな
しや秋の長雨

やうやくに足立つ程の歩みざまなしつつ夢の
魔の來るかな

はしきやしわが湖の水口を戀とこそ云へ君に
ながるる





君來ると南の嶋の磯に立つ夢などのなほさか
んなるかな

にはかにも我が思へらく秋來る春夏あらしこ
の秋の後に

秋の日のうす桃いろにかぎろへば赤とんぼと
ぶ白き蝶とぶ

悲しみぬたそがれ近くなりぬれば秋風光る海
邊の街を



こちよき秋の朝かないとほそき金の筋見ゆ
われの心に



旅せんと人の語ると男をば捨てんと云ふと胸
に沁むかな

何やらん片手の小指しびれつと人のつぶやく
秋の晝かな

黒きもの沈める海を見て立てば心の半呆けも
こそすれ





秋の風君見ることのささはりを歎ける人が萱
の穂を見る

朝の露まばらに白き草原を前にしたるや君を
置けるや

こほろぎや夜語ることうす寒しこのおもひき
を知れる五人

罌粟色の更紗の切を手ずさびに小口より切る
秋の朝かな





ましろなるちさき杯さかづきわれよりもきよくめでたき
少女をとめなるべし

燈籠とうろうに火ひの點つかざることによりあき秋の悲かなしと
今いまもおもひぬ



はかなげにおのれ見みられぬあき秋來るとうすお納なめ
戸どの裕あはせまとへば

わが好このむ小形こがたの箱はこの三みつ四よつを戀こひしき人ひととも
てあそぶ夜よ



秋の日は淋しせつなし部屋へやの棚たなあらゆるもの
をもて飾れども

何ものか見むと思はばこともなく白刃しろばのごと
く行き通る人

あめつちの秋はわが倚よるまろ柱はしらきよくつめた
きこの圓柱

日ぐらしが濡色の音を立つる時湯ぞ浴びまほ
し石の湯槽ゆがまに





静かなる根葱の色する大海の秋の色こそかな
しかりけれ

身のほとり唯だ過ぎて行く風なども慕はしと
する若き心ぞ

夜の長し寝起きに何のおもはるるかの軽卒こ
のかるはづみ

水に居る根白き蘆にあらずやと身のおもはれ
ぬ秋の朝風





天つ神猛き心をわれにより傳へしめんと思は
ざるらし

足らざりと言葉を足してももの云へば戀とひと
しき情となりぬ

やがて見ん銀杏の黄をばほのめかす秋のはじ
めの豆のさやかな

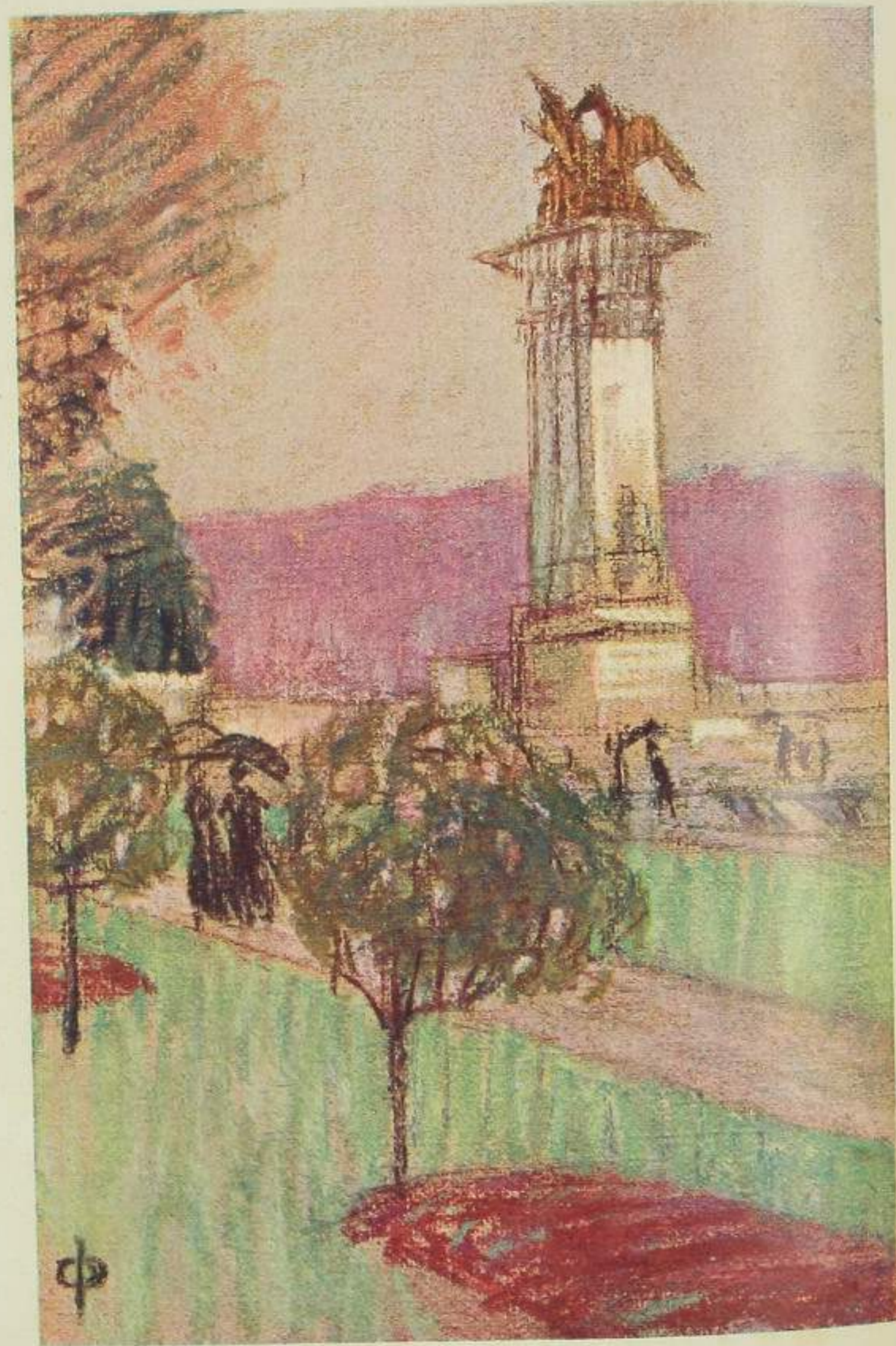
こし方の戀しさも皆そこなはれ憎かるもの
多くなりゆく





秋來る窓と机の一尺のはざまにありてものを
こそおもへ

夕の日はてなき磯の砂染めて悲しき風の波よ
りぞ吹く



秋来る窓と机の一尺のはざまにありてものを
こそおもへ

夕日はてなき霞の裾染めて悲しき風の波よ
りど吹く



夏より秋へ

中
の
巻



風かぜに咲さく紅に朝あ顔なのあはれさよ新しん吉き原げんも秋あきの來き
ぬらん

やすみなきあらしの中なかに棲すむ鳥とりとおのれをお
もふ君きみとあること

初はつ秋あきや雁かり來き紅にのちるやうに赤あかとんぼとぶ夕ゆふぐ
れの風かぜ

湯ゆ帷か布たをば重かさね著きしたるしろき雨あめふる朝あさ方がたの
こほろぎの聲こゑ



いつの日も同じさまなる心をば知れる二人は
泣かず別れて



かりそめの文を書く日はあはれにも君を遠し
とうち思はぬ日

君は憂し千里の遠に居ながらにわれを放たず
耳にももの云ふ

つかの間にかくも人の衰ふることわり知り
ぬ君に別れて





子と母と淋しがれるを目の前のことと思はば
かへり來よ君

死のころも生きながら著て柩をば四月いでざ
るわれのおとろへ

海見ればまるび入るべく別れつる日のかなし
くもおもかけに立つ

そぞろにも消えもて行くがやうなりと心のさ
きを書くは誰がこと





夕ゆふばえやはるけき國くにへわが夢ゆめの行ゆくあとのご
と海うみの染そまりぬ

來こよと云いひ行ゆくべしと書かきこの日ひより初はめて
夜よるの往いにしこちす

吾われ妹い子こが心こゝろの下したにかへりれりと云いふらん人ひとを
見みにか行ゆくべき

子こ等らあきてかへり見みがちに君きみを追おひ海うみこゆる
日ひもさはれ疾とく來こよ



わがこころ下司になりぬと君なくて香油を塗
らぬ髪に思ひぬ



生れたる日のごと死ぬる日のごとく今日を思
ひてわれ旅に行く

わが泣けば露西亞少女来て肩なでぬアリヨル
號の白き船室

戀人に逢はん日遠しふるさつを見ん日知られ
ずいかかすべきぞ



京を見ん七瀬の黒き瞳をも見んこの日の後の
旅人の夢



甲板の靴音さけば淋しさも俄に戀のころと
變る

船の上やまとの女あかつきを頼りなげにも歩
む甲板

末の子が讚美歌うたふふしまはしあやにく立
つる浪の音かな





金色の波もも色の波の山うちかさなりてみづ
うみ氷る

ここちよき胡地の阜月の厚氷夕日の花のひろ
く散りしく

犬の子と我子の顔と七つ八つかたへに並べ乳
賣る女

風吹けば右も左もはて知らぬ水の中なる蘆の
葉ひかる





蒙古犬コサツクの顔たそがれの灰ばむ原を追
ひくる如し

水づきたる楊の枝もシベリヤの裸足少女もあ
はれなりけれ

楊の木穂すずき程に末見えてなびく出水の森
を今日行く

真向ひの囚人車をば見ぬために伏目をしつ
つ
笛鳴れと待つ





シベリヤに流されて行く囚人の中の少女が著
たるくれなる

かす知らず静脈のごとうちちがひ氷る小川と
鈴蘭の花

夕ぐれは車の卓の眩ぬれぬ胡地のけしきの心
ぼそさに

蒙古犬はた驛の人六人程ありと記すも旅はけ
うとし



やごとなき白銀いろの冬宮かはた亡霊の住める家居か



よこしまに斬らるるこちして入りぬ聖者を描ける王宮の門

三千里わが戀人のかたはらに柳の絮の散る日に來る

下に住む西班牙の子がピアノをば叩けば起き
てくる髪を梳く





初夏やブロードの髪くるき髪ざれごとを云ふ
石のきざはし

四つ辻の薔薇を積みたる車よりよき香ちるな
り初夏の雨

うすものが芝居の廊を歩む時オオトモビルに
隠れ行く時

くれなるの杯に入りあな戀し嬉しなど云ふ細
き麥わら





噴水が風に散るなり君が被るましろき絹の風に散るなり

門入りて敷石の道いとながし君と寝んとて夜毎かへれば

翅ある子日曜の日はあまた居ぬリユクサンブルの花の小みちに

君達の尺の帆舟のあやふけれリユクサンブルの噴水のもと





君きみと行くゆノオトル・ダムたふの塔たばかりうす薄も桃も色いろにの
 ころゆふ夕ゆふぐれ



だあだあと聲こゑの尻しりひく歌うたうたひ窓まど下したに來きぬも
 のをおもへば

ああ阜ふ月つき佛ぶつ蘭らん西せいの野のは火ひの色いろす君きみも雛ひな罌りやう粟ぼわ
 れも雛ひな罌りやう粟ぼ

セエヌ川がはよき船ふねどもにうち向むかひ橡くわの並なみ木きの青あお
 き呼い吸き吹ふく





室の中むろのちゆうに素足すそしてある姿すがたなど見知みしれる人は來きても見みよかし

泣なきて云いふあまりに早はやくわれの來こし天國てんごくなれば心こころおちるず

またもなく夜よの黒地くろぢはなまめかし上うへに灯あかりをおきたをやめを置おく

何れぞややつれ姿すがたは旅人たびびとのつね戀人こひびとは若わかやぐがつね





大かがみ怪しくわれの香はしとおもほゆるか
な灯の匂ふまへ

うす青く夜の明け行くうす青くメルルの鳥の
聲の明け行く

森の奥薔薇の花のあるかぎり水色の羅を被く
たそがれ

木によりて匂へる薔薇秋山の鳶にまさりては
かなき薔薇





物賣にわれもならまし初夏のシヤンゼリゼエ
の青き木のもと

わが小舟雨に濡れつつ白鳥とうち並び行く二
時がほど

生きて世にまた見んことの難からば悲しから
まし暮れゆく巴里

旅びとの涙なれどもなごやかに流るるものか
夜の巴里に





馬車ばしやにある芝居しばがへりの夏の夜身よるみの程ほどよりは
くやしからざり

柵さくに來きて番附賣ばんづりがもの言いひぬ芝居しばの前まへの夏の夜よるの月つき

寺てらへ行く薔薇ばらいろの頬ほとすれちがふ石阪道いさかみちの
夏の朝あさかぜ

(以下十四首佛蘭西南部のツウルにて)

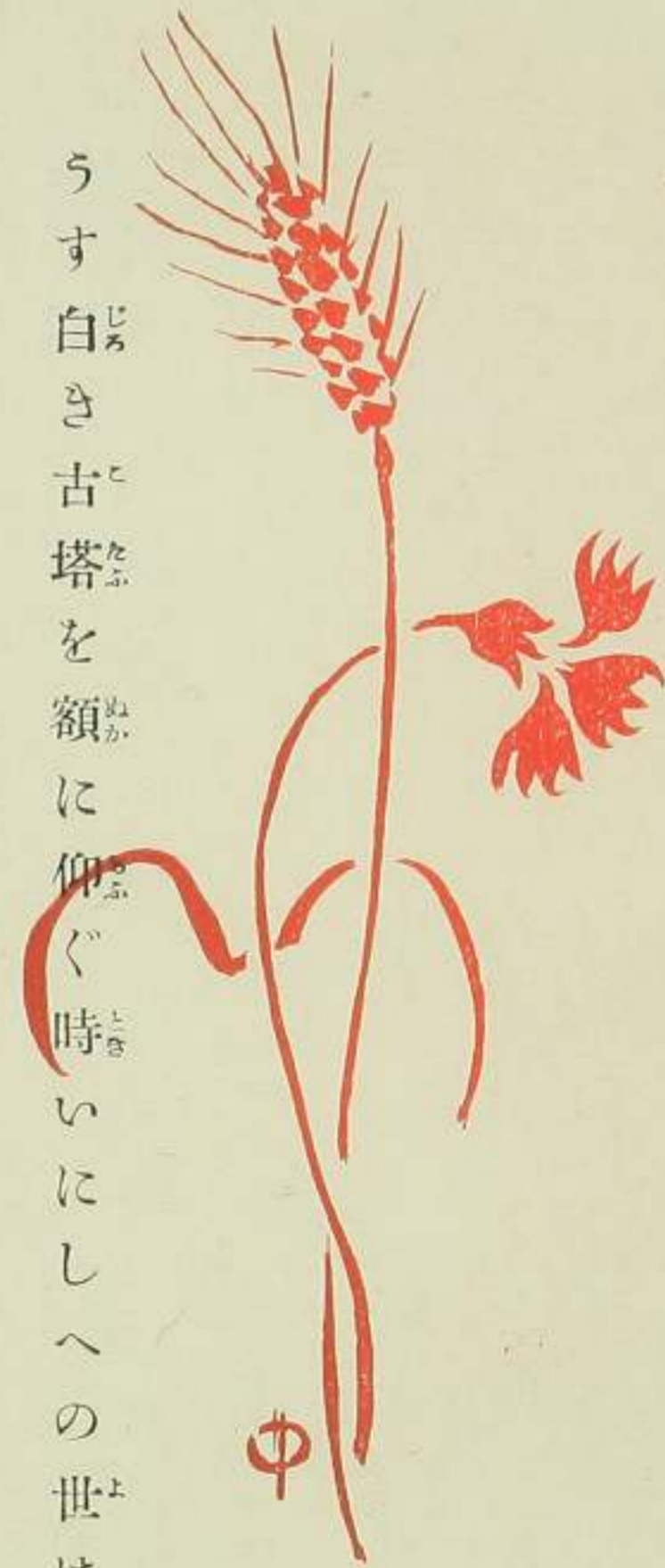
雛罌粟ひなげしと矢車草やぐるまとそよ風かぜと田舎少女いなかぢよのしろき
紗しよの帽ぼう





美しくしき西班牙女よとあな無禮人の妻をばか
く呼ぶは誰

君とわれロアルの橋を渡る時白楊の香の川風
ぞ吹く



うす白き古塔を額に仰ぐ時にしへの世は知
らねどよろし

日の夕ルイ王の子の眠るとて悲しき鐘を打つ
カセドラル



あえかなる踊子來りわが前に杯をあぐ灯の海の底

夏川のセエルに臨むよき酒場フツクの莊の雛罌粟の花

「ひたむきに左に走れ御者」と呼ぶ夫人の聲も山の夜に好し

月さしぬロアルの河の水上の夫人ビニョレが石の山莊





響^{あろじ}する家の少女が薪^{たきぎ}をば捜^{さが}す岩屋^{いわや}のしろき蠟^{ろう}
の灯^ひ

歌^{うた}うたひ舞^まふ少女^{をとめ}をば石壁^{いしかべ}にわななきうつす
蠟^{ろう}の燭^{しよく}かな

ひなげしを摘^つみて散^ちらせる石^{いし}の卓^た血^ちやこぼれ
しとふと心^{こゝろ}冷^{ひや}ゆ
前^{まへ}に引^ひくとばりの如^{ごと}く浅^{あさ}みどりアカシヤの木^き
のゆらぐ夕^{ゆふ}ぐれ





書ひらの程ほどおもひ沈しづむも許ゆるすべし夜よは人ひと並ならに氣きの
狂くるへかし



さま悪わるしくいたくも物ものを思おもふかな東ひがしの嶋しまに子こ
等らを置おくとて

しら波なみの沫うめのやうなる眞まこと珠たまの輪りん頸くびに掛かくれば
涼すず風かぜぞ吹ふく

長なが椅子いすに藤ふじむらさきの靴くつ足た袋ぶくろの艶えんに横よこたふ夜よ
明あけごろかな



わが背子は金の飾りの上脊をまひなひにしぬ
夜遊びのあと



あとつけて走る船こそをかしけれ君とわれと
の川道遙に

わが馬車の外に何ある浅みどりプラタンの葉
のあかつきの風

巴里なるオペラの前の大海にわれもただよふ
夏の夕ぐれ





ふらんすの八月はちごわつの朝涼あさすずしくも靴くつくくとなる石いし
だたみかな

ましるなる孔雀しじゆくの少女せうにょ卓たくに來きて君きみと物もの云いふ憎にく
しめてたし

サツフオオの賸すり泣なみをば後あとにして君きみが手てによ
り降くだるきざはし

西にしひがしやうやく知しれる心こころより帷とばりを揚あげぬ夕ゆふ
雲くものため





目の前に霧のくだるをおもふかな羅をかづき
たる君ぞ來ませる

あちこちに焰しきりに燃ゆと見ゆあらず手組
める男と女

網戸引くロオチユの中に席とれる公爵の子の
夜のうすもの

はだへよりはだへに吹きてなまめかし芝居の
廊の夏のそよ風





容易くもめでたきものを集めたり序幕の前の
時のたふとさ

こちよき淵のごとかり身を投げん舞臺の君
の眸のくまどり

髪長き新男なるエルナニのいのちを欲しと角
吹く角吹く

海峡に灰を撒きたる星ぐもり我を載せたる船
流れゆく



ひんがしのはなれ小島に子をおきて泣く女ゆ
ゑさむき船かな



海峡の燈臺の灯は明滅すわが落ちつかぬ旅の
ところに

ゆゆしかる身の果としも思はねど大海に寝て
泣く夜となりぬ

海峡の夜風に聞けば旅人のざれたる聲もかな
しきものを





何れぞや我かたはらに子の無きと子のかたは
らに母のあらぬと

星あまた旅の女をとりかこみ寒き息しぬ船を
下れば

僧俗のさだかに見えす讚美歌す大英國の君王
の寺

王宮のまへの廣場を七かへり花と女の馬車ぞ
輪を描く





黒毛帽金絲の紐に願くくるわかき近衛に物言ひてまし

大宮も白鳥の羽も水色に見ゆる夕となりけるかな

白塔の窓のあかりは鳥羽玉のくらがりよりもかなしかりけれ
(倫敦塔にて)

さし過ぎし目にあぢきなしいぎりすは上白みたる桃色の國



埃及の上著を著たる歌女の後ろを歩み灯の國
に行く



ジブシイの指鳴る時にくる髪は膝をはなれて
杯をとる

朝にはこの都賞め夕には去なんと泣くも旅の
ころぞ

象を降り駱駝を降りて母と喚びその一人だに
走りこよかし





花を嗅ぎしげる青木の蔭ふめば夕露の如もの
泣かるる

若やかに青き木のもと此處ゆかんまた新しき
夢の路ぞと



戀したる身のおとろへに血を假せよいく温室
の南国の花

手を伸す水の少女か一むらの濃き緑より睡蓮
の咲く



水に焚く夏の香爐のけぶりたるうす紫の睡蓮
の花

青芝の海を渡りて毛櫂の木の島にあるなり人
とそよかせ

戀するや遠き國をば思へるやこのたそがれの
睡蓮の花

さびしくも後ろの方の古き城うす黄に光る森
の道かな





しづかなる森に向ひて丘めぐりきざはしのご
と花薔薇さく

わがあるは落ちたる底か天上かさしも思はれ
かくしも思ふ

戀するにむつかしきこと何のこる三千里さへ
一人にて來し

衰へに目まひ覚えしその朝のその夕にはくれ
なるを著る





わが宿のアカシヤの木きのうしろなる赤あかき晝ひる室むろ
の暮くれ残のこるかな



わが思おもひいとせまぐるしふるさとを離はなれず君きみ
と阿あ子こをはなれず

セエヌ川がは船ふね上のぼる時とき見み馴なれたる夕ゆふの橋はしの暗くらきむ
らさき

神かみのごと車くるまを驅かりてわれら行く眠ねむりに行くは
天あまならねども



君きみとわれ高たかきに上のぼり橋はしあまたかかれる水みづを覗のぞ
く夕ゆふぐれ



おのづから大おほ路ぢの白しろき敷き石いしに心こころさをはれ夕ゆふあ
るきする

率ひらても行いく男おとこの持もてる細ほそ杖づえが魔ま法ほうのごとく街まち
の其その處ところ此こゝ處ところ

すばしこき車くるまの馬うまといたはりぬ君きみがあるなる
森もりにいたれば





ことごとと敷石を踏むひづめこそ夜の世界の
句ひならまし

わが聞の眞紅のあかりそれさへも髪を掴むと
病めばおそれぬ

室の中に君が句ひのただよふと酔ひ癡れをれ
ば夕となりぬ

雨に行く句ひと色のふりそそぐマロニエの木
の若葉する路





午^ご前^{ぜん}二^に時^じまだ廊^{らう}の灯^ひの消^けぬ前^{まへ}にかへり來^くるこ
と三^み日^か四^よ日^がつづく
思^{おも}はると涙^{なみだ}を流^{なが}したため息^{いき}をよるこびにつく樂^{たのし}
みにつく

石^{いし}として据^すゑられしごと我^われありぬ日^ひの美^{うつく}く
しき朝^{あさ}のさざはし

酒^{さけ}場^ばの地^ち獄^{ごく}の給^{たま}仕^じかのこともその日^ひの業^{わざ}も見^み
透^{すか}かして云^いふ





鳩はととなり遠とほきところへ汝ながこころ飛とび行ゆきけ
んと手てをとりて聞きく



澄あめる水みづほのほ浮うけたりこれや何なにロダンの作し
る男おとこと女をんな

哀あはれなる香かこそただよへ雛ひな罌け粟しに藍あまをにじま
せ野の邊べの暮くるれば

水みづいろの木きの下したの椅子いすうつくしき指ゆびもて叩たたき
來こよと喚よぶ人ひと





初夏の野に一日居ぬ君とわれ緑と金にかくまはれつつ

一人にて朝はあらん園のうち君がさがしに來たまはんまで



繪の中の飛ぶ天女さへ仇なすとよきは憎みぬ
ありのすさびに

ジプシイの見世物小屋のとりおくれ祭の後の
並木とならぶ



箱車はこぐるまやからを載せて見世物師みやものし瘦馬やせうまひとつつけ
しかなしさ

ありふれし戀こひざめよりも哀あはれなり街の祭まつりのあ
くる日の風かぜ

木の蔭かげに眠ねりの足あしらね御者おんじやの顔かほひとつ見みゆる
もなまめかしけれ

ふつつかに鳥とりのやうなる裳もをひろげ花屋はなやの媼おば
が店開みせあくる頃とき





寒からんモンマルトルの女とり文受くる子も
秋の朝は

普請場のかこひに貼れるお納戸の廣告繪など
さむき朝かな

秋風は凱旋門をわらひにか泣きにか來る八つ
の辻より

かへりみぬシヤンゼエのうづだかき並木
の持てる葡萄色の秋





自動車じどうしゃの後ろうしろに高たかき噴水ふんすいの立たつと思おもふがこ
ちよちよきかな

森もりに入いる白しろき大おほ道みちわかかき日ひの戀こひの心こころのおもむ
く如ごとし

ひろくして盡つきんともせず森もりの道みち涙なみだするまで
嫉ねたましきまで

松まつの幹みき泣なける女をんなの目めの色いろすその島しまかこむ初はつ秋あき
の水みづ





手のひらに小雨かかると云ふことにしら玉の
齒を見せてわらひぬ

船待の木の腰かけに鳥の毛の帽子がものを
もふ朝かな



船は皆二十足らずが漕ぎて過ぐ鳥のめうとの
浮けるあひだを

浮床を靴のたたけば白き鳥もの云ひに來ぬ何
をやらまし



白鳥をもてあそぶため手を打ちぬはた嬉しさ
のおもひでのため

傘あけてわれかしづきぬ鳥の人船を上れば銀
の雨ふる

しぐれきぬ肱掛椅子の十歩まへ赤き花匍ふア
カシヤの木に

離れたるいちじくの屋根彼處なる男女も雨を
わぶらん





秋の日の泉の波を染め分けぬ雨と風とが青と
白とに

ももいろと麩脂の輪をば花草の置きたる庭も
秋の雨ふる

美しくしき女ばかりの船めぐり追従をする白鳥
のむれ

ロン・シヤンの競馬の家は盲ひたる少女の如く
草踏みて立つ





冷^{つめ}たかりけれ
 樓^{ろう}に見^みるセエヌの底^{そこ}の秋^{あき}の空^{そら}わがうれひより



薄^{うす}紺^{こん}の裾^{すそ}
 秋^{あき}の風^{かぜ}支^し那^なすだれよりセエヌをば覗^{のぞ}ける君^{きみ}の

秋^{あき}の風^{かぜ}かな
 白^{はく}楊^{やう}のめてたきことをはてもなく思^{おも}へる時^{とき}の

秋^{あき}の野^のに出^いづ
 海^{うみ}に似^にる森^{もり}をはなれて白^{はく}楊^{やう}のまばらに立^たてる





馬車ひとつやとひそこなひ背負ふこともとよ
り知らずなめげなるかな

川に沿ふ水いろの茶屋白き茶屋并オロンの窓
ピアノ鳴る窓

曲りたる石のきざはし秋風のよるめきて吹く
石のきざはし

(以下二十首フオンテンプロウにて)

唯だあるは金の王座と水晶の曇れる器たび人
のわれ





いにしへの君王の閨金色の枕にかよふ秋の初
かぜ

うるはしきアンリイ四世の踊場にふたり三人
の低き靴音

水晶の燈籠のもと細き手を玉に與へて人あゆ
みけん

年の名も王達の名も忘れずにいふ殿守の寒き
聲かな





大宮のうしろの水の石垣に桃色を著て肱かく
る人

大宮のゴブラン織に秋風の通へば旅のおのれ
らも泣く

王后はいまさぬ跡もめでたかり黄金のとばり
しら玉の卓

そのかみの後の調度うす紅に光れる殿の窓あ
かりかな





雲くもきたり濡ぬれて遊あそびぬ白楊びやくやうの木立こだちのなかの圓まろ
き水盤すゐばん

大宮おほみやの石いしのさざはし冷つめたかり踏ふむ旅人たびとの秋あきの
こころに

わが髪かみもうす紫むらさきにしづくしぬ毛櫛けしの木立こだちを風かぜ
のすぐれば

馬車ばしやひとつ蹄音つひおとたてて過すぎ去されば毛櫛けしのあか
りの青あおくひろがる



下草したくさにうす桃色ももいろのかけ引きぬ白樺しろがはの木きとわれ
の姿すがたと



金を刷すり紫むらさきを撒まく風かぜありてあかるさ秋あきの森もりの
道みちかな

下草したくさの赤紫あかむらさきにしら樺かばのむらむら立ちてうらが
なしけれ

浪なみのごと白楊びやくやう立ちぬ見みるかぎり遠とほく青あおめる森もり
の海うみかな





身のほそる我が愁にも似て清し秋の森なるし
ら樺の枝

たそがれは森よりわれを追ふごとし君と踏む
べき街の灯のため

海底の砂に横たふ魚の如身の衰へて旅寝する
かな

(以下十四首ミュンヘンにて)

眠ることなくて我見る悪しき夢うとましき夢
かずまさり行く





歐羅巴の光の中を行きながら飽くこと知らで
泣く女われ

青白き天の日一つわが上を照して寒し外にも
のなし

子をすてて君に來りしその日より物狂ほしく
なりにけるかな

わが心よし狂ふとも戀人よ君が口より教へた
まふな





目の白く盲ひたる群の争ひて走るがごときイザル川かな

イザル川白き濁りに渡したる長き橋よりあふぐ夕雲

いかばかりもの思ふらん君が手にわが手はあれど倒れんとしぬ

青き枝こがねの繡をおける枝朱を盛れる枝雨のながるる





わが船は白き墓場となりけり港の端を君が踏む時

わが夫子よ君も物憂しかかること云ひはなつまで狂ほしきかな

戀人と世界を歩む旅にしてなどわれ一人さびしかるらん

其處此處に紅葉の枝を隠したる木深き森の秋のたはぶれ





さびしげに海に浮べりわが心エトナの火をば
猶いだけでも

佛蘭西に君をのこして我が船の出づる港の秋
の灰色



ゆく先かはたこし方かわが心引くなるもの
ありか知らずも

飛魚は赤とんぼほど浪こすと云ふ話など疾く
語らまし



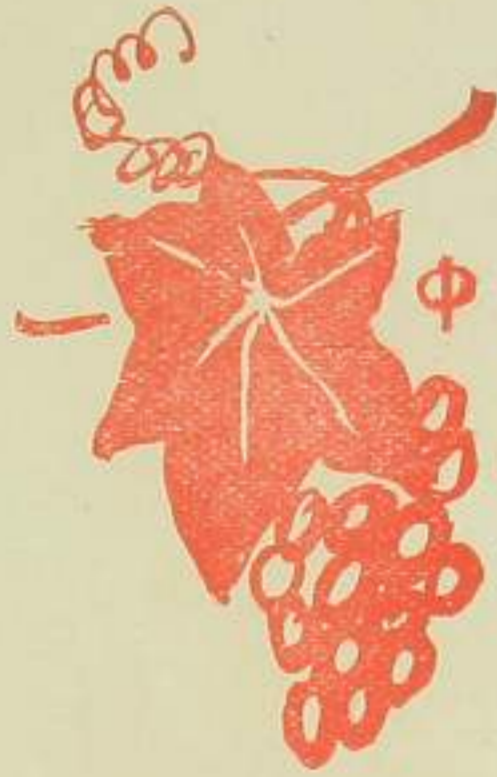
秋の海われは悲しき喪の國をさして去ぬなり
大船にして

秋くれば根も枯れぬらん
籬粟は夜な夜な船
の夢に立てども

南國の木の実を吸へば涙あつ昨日の戀の味に
似たれば

四十度の傾斜に惱むわが船に馬太傳讀む尼の
うとまし





夜^よ明^あくれれば船^{ふね}ぞ港^{みなと}に入^いると云^いふ戀^{こひ}の心^{こころ}は行^ゆ方^{かた}
知^しらずも



云^いひがたさわりなき涙^{なみだ}おつるなり日^ひ向^{むか}の灘^{なだ}の
青^{あを}き潮^{うしほ}に

船^{せん}室^{しつ}の二^に十^{じふ}四^し時^{とき}に間^まなく聞^きく浪^{なみ}音^ねよりも盡^つき
ぬ戀^{こひ}する

この人^{ひと}はなにを商^{あきな}ふ戀^{こひ}びとの紅^{あか}き涙^{なみだ}としろき
涙^{なみだ}と

(ゴロンボにて玉賣の土人に)



船ふねに寝ねるいやはての夜よのおもひなど哀あはれなり
けり女をんなごころに



わが船ふねの著つくよろこびに父ちち母ははのよみがへり來こ
ばうれしからまし

ふるさとの和泉いづみの山やまを内海うちうみの霧きりの中なかよりのぞ
くあけがた

泣なくは誰たれ和田わだの岬みさきの見みゆるとて満船まんせんの人ひとど
よむ中なかより





四十日ほど寝くたれ髪の我がありしうす水色の船室を出づ

めでたかるわが百年の中頃に四十日ありけるしるき船室

涙おつかの登天のこちせしいでたちの日に似ざるものから

水いろの船にかくろひ黒髪の人かへりきぬ捨てられにけん





あはれにも心もとなき遠方にいのちをおける
汝が母かへる

味気なく心みだれぬわが手のみ七人の子を撫
づる日に逢ひ

マルセエユいとあわてたるこちして相乗し
たるいやはての馬車

別れ来し港の朝のけしきなど片はし語り涙な
がるる



子を思ふ不淨の涙身を流れわれ一人のみ天國
を墜つ



家に入り十日になりぬ何せしぞ今日も昨日も
はかなさばかり

海こえて戀しき君を見にゆくと人の語れば涙
こぼるる

一人居て身のうらめしさまざる時わが黒髪に
蛇の生るる



しろがねの甕にささんわが愁銀杏の色の三十
路の愁



心より見じ聞かじとて歸りこし國ならなくに
事のものうき

阿子と云ふ草やはらかに生ひしげる園生にま
ろび泣寝すわれは

子を思ひ一人かへるとほめられぬ苦しきこと
を賞め給ふかな





今さら^{いま}に我^われくやくも七^{なな}人^{たり}の子^この母^{はは}として
品^{しな}のさだまる

ああおのれ末^{すえ}のこの世^よにふさはざる火^ひの戀^{こひ}を
して短命^{たんめい}に死^しぬ

わがいのち男^{をとこ}の戀^{こひ}のそれよりも危^{あやふ}きものとか
ねて思^{おも}へり

歸^{かへ}る日^ひをさしも急^{いそ}がず船^{ふね}に居^ゐしその日^ひのまま
のむなしき心^{こころ}





心より外にさ云へど已みがたき親のおもひを
われもしにけん

母は今汝をひと目見て足りたれば心かはりぬ
せんすべもなし

君見んともてる願ひのかなはぬを病と云ふも
ふるめかしけれ

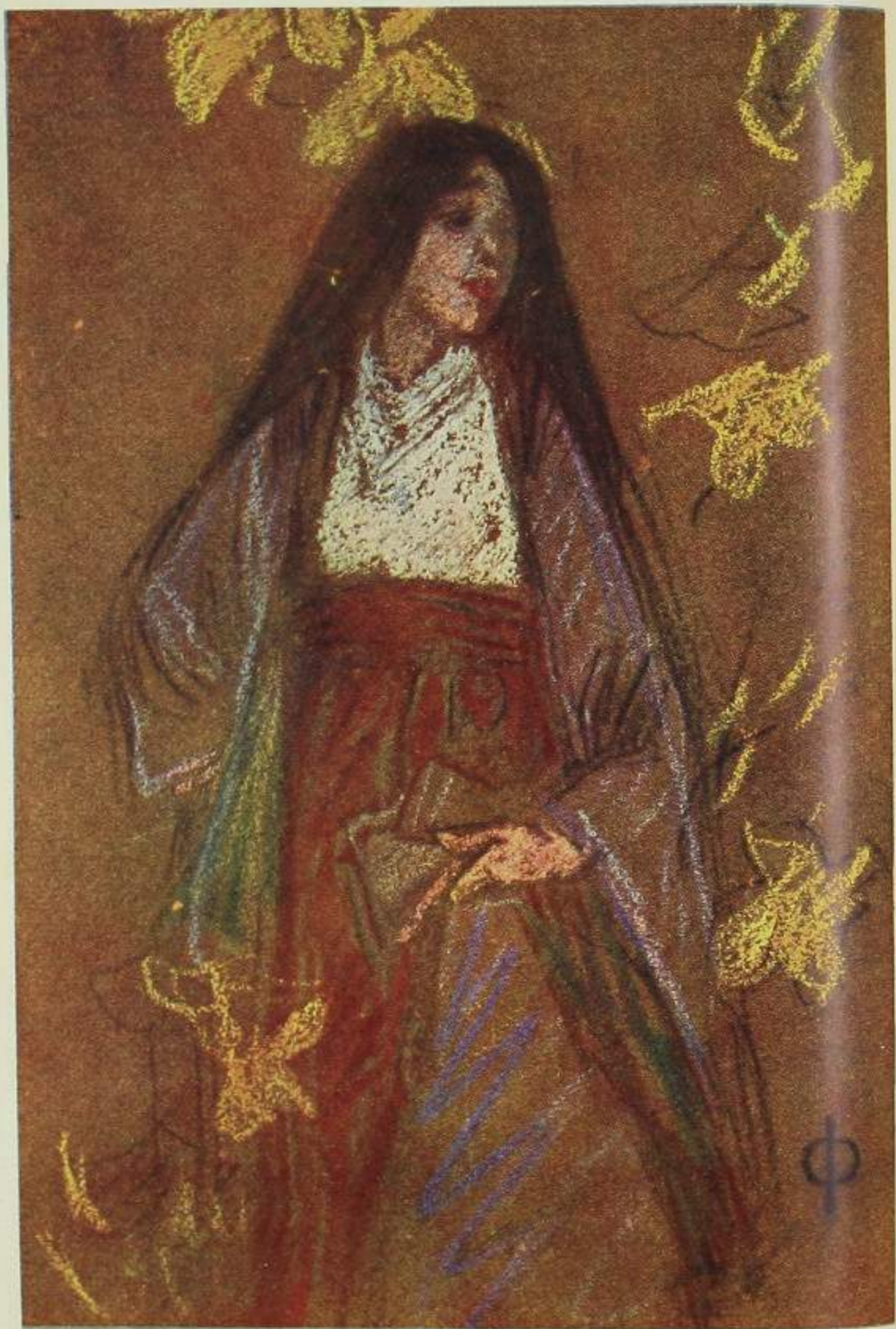
けうとしやおろそかならぬ戀すると今日知る
ごとく人の云ふこと





身は瘦せぬしら刃の如き別離をばわがおもひ
出の中に見るたび





身は瘦せぬしら刃の如き別離をばわがこもひ
川の中に見るたび



夏
よ
り
秋
へ

下
の
卷

I

山の動く日來る、

かく云へど人われを信ぜじ。

山は姑く眠りしのみ、

その昔彼等皆火に燃えて動きしものを。

されど、そは信ぜずともよし、

人よ、ああ、唯これを信ぜよ、

すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。

II

一人稱にてのみ物書かばや、

われはさびしき片隅の女ぞ。

一人稱にてのみ物書かばや、

われは、われは。

III

額にも、肩にも、
 わが髪ぞほつる。
 しをたれて湯瀧に打たるるこころもち……
 ほつとつく溜息は火の如く且つ狂ほし。
 かかること知らぬ男
 われを褒めやがてまた譏るらん。

IV

われは愛づ、新しき薄手の玻璃の鉢を。
 水もこれに湛ふれば涙と流れ、
 花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
 恐るるは、若し粗忽なる男の手に碎け去らば――
 素焼の土器よりも更に脆く、かよわく……

V

青く、且つ白く、
 剃刀の刃のころよきかな。
 暑き草いきれにきりぎりす啼き、
 ハモニカを近所の下宿にて吹くは懶けれども、
 わが油じみし櫛笥の底をかき探れば、
 陸奥紙に包まれし細身の剃刀こそ出づるなれ。

VI

にがきか、からきか、煙草の味は。
 煙草の味は云ひがたし。
 甘しと云はば、粗忽人、
 砂糖の如しとや思はん。
 われは近頃煙草を喫み習へど、
 喫むことを人に秘めぬ。
 蔭口に男に似ると云はるはよし、
 唯おそる、かの粗忽人こそいと多なれ。

VII

「鞭を忘るな」と

ツアラツストラは云ひけり。

女こそ牛なれ、また羊なれ、

附け足して我ぞ云はまし、

「野に放てよ。」

VIII

わが祖母の母はわが知らぬ人なれど、

すべてに華奢を好みしとよ。

水晶の珠數にも倦き、珊瑚の珠數にも倦き、

この青玉の珠數を爪繰りしとよ。

我はこの青玉の珠數を解きほぐして、

貧しさに、與ふべき玩具なきまま、

一つ一つわが兒等の手にぞ置くなる。

IX

わが歌の短ければ、
 言葉ことばを省はぶくと人ひとおもへり。
 わが歌うたに省はぶくべきもの無し、
 また何なにを附つけ足たさん。
 わが心こころは魚うそならねば鰓えらを有もたず、
 ただ一ひと息いきにこそ一切いっさいを歌うたふなれ。

X

すいつちよよ、すいつちよよ、
 初秋はつあきのちひさきひら筆りき築きを吹ふくすいつちよよ、
 汝みづかが聲こゑに青あおき蚊帳かやは更さらに青あおし。
 すいつちよよ、なぜに聲こゑをば途切きりすぞ、
 初秋はつあきの夜よの蚊帳かやは水銀みずぎんの如ごとく冷つめきを……
 すいつちよよ、すいつちよよ。

XI

油蟬あぶらせみのじじ、じじと啼なくは、
 アルボオス石鹼しよげんの泡あわなり、
 慳けん貪どんなる男をとこの方かた形かたちに開ひらく大口おほくちなり、
 手握てづかみの二に錢ぜに銅貨どうかなり、
 いつの世よもさらにある藝術げいじゆの批評ひひきやうなり……

XII

夏なつの夜よのどしや降ふりの雨あめ……
 わが家いえは泥田どろたの底そことなるらん。
 柱はしらみな草くさの如ごとく撓たおみ、
 そを傳つたふ雨漏あまもりの水みづは蛇へびの如ごとし。
 寢汗ねあせの香か……かなしさよ、よわき子この齒はぎしり……
 青あおき蚊帳かやは蛙かへるの喉のどの如ごとく脹はれ、
 肩かたなる髪かみは鹿子菜ひらこの如ごとく戦まぐ。
 この中なかに青あお白しろきわが顔かおこそ
 芥あぐたに流ながれて寄よれる月見草つきみくさなれ。

唯だ「人」と、若くは「我」とのみ名告るぞよき。
 雑多の形容詞を附け足さんとするは誰れぞ。
 大と云ひ、小と云ひ、善と云ひ、惡と云ひ……
 そは事を好む子供の所爲なり。
 何物をも附け足さぬは、
 やがて一切を備へし故なるを。

相共にその自らの力を試さぬ人を行かじ。
 彼等の心には隙あり、油斷あり。
 よしもなき事ども——善惡と云ふ事どもを思へるよ。

過去はたとひ青き、酸き、充たざる、如何にありしとも、
今は甘きか、匂はしきか、
今は舌を刺す力あるか、無きか。
君よ、今の役に立たぬ果實を摘む勿れ。

商人等の催せる饗宴に、
我の一人まじれるは奇異ならん。
我の周囲は目にて満ちぬ。
商人等よ、晚餐を振舞へるは君達なれど、
我の食ふは猶我の舌の味ふなり。
されど商人等よ、おのおの其最近の所得に就いて誇
りかに語れ、
我はさる事をも聴くをよろこぶ。

XVII

行くほどに、街は暮れて、明るき月夜の海となり、
人は魚の如く跳り、ともし火は波の如く泡立つ。
地に落つる人影にわが影の入りまじる如く、
われは他の遊ぶ遊ぶ……

われは知る、つひに一人なり。

XVIII

かの齒車は断間なく動けり、
静かなるまでいと忙しく動けり、
かれに空しき言葉なし、
かれは彼の中に一切を刻むやらん。

すべて異性の手より受取るは、

温かく、やさしく、匂はしく、派手に、

胸の血のわりなくもときめくよ。

女のみありて、

女の手より女の手へ渡る物のうら淋しく、

おなじ茶人の間に受渡す言葉の如く、寒げに質素な

るかな。

このゆゑに我は女の味方ならず、

このゆゑに我は裏切らぬ男を嫌ふ。

かの袴のみけばけばしくて、淋しかる女の群よ、

かの傷なき紳士よ。

わが心は油よ、
より多く火をば好めど、
水に付き流るるも是非なや。

鞣さざる象皮の如く、
受精せざる卵の如く、
胎を出でて早くも老いし顔する駱駝の子の如く、
目を過るもの凡そ此三色を出でず。
彼等は豊草原の瑞穂の國の一流の人なり。

白蟻の仔蟲こそ惨しけれ。
 職蟲の勝手なる刺激に、
 兵蟲とも、生殖蟲とも、職蟲とも、
 即ち變へらるるなり。
 職蟲の其勝手なる無残なる刺激は
 陋劣にも食物をもてす。
 さて又其等各種の蟲の多きに過ぐれば、
 職蟲はやがて刺し殺して食ふとよ。

品子、ヅアラツストラを一日一夜に読み終り、
 その曉、ほつれし髪を搔上げて、
 『辭の過ぎたるかな』と。
 しかも、品子の動悸は、羅を透して慄へ、
 その全身の汗は、産の夜の如くなりき。

さて十日経たり。
 品子は青ざめて胃弱の人の如く、
 この十日、良人と多く語らず、我子等を抱かず。

晶子の幻に見るは、
グアラッストラの
黒き巨像の上げたる
右の手なり。

XXIV

ただ一人ある日よりも、
大勢と居る席で、
わが姿こそしよんぼりと細りやつるる。
常は湯のやうに湧く涙も
かかる日は凍りぬらん。
立梓模様の水淺葱はてな湯帷布を著たれども、
わが姿人にまじればうら淋しや。

わが家の八月の日の午後、
 庭の盥に子供等の飼ふ赤目高は
 生湯の水に浮上り、
 瑛瑛色の日光に、
 焼針の頭を並べて呼吸をする。
 その上にモザイク形の影を映す
 静かに大きな金網……
 木の葉は皆膏汗に光り、
 隣の肥えた白い猫は木の根に眠つた儘死ぬやらん。

わがする幅廣の帯こそ大蛇なれ、
 じりじりと、じりじりと巻きしむる……

夜あけに降つた夕立が
 庭に流した白い砂、
 こなひだ見て来た岩代の
 摺上川がおもはれる。
 砂に埋れて顔を出す
 濡れた黄色の月見草、
 あれ、あの花が憎いほど
 わたしの心をさし覗き……
 おもひなしかは知らねども、

やつれたわたしを引立たす。

青いすいつちよよ、

青い蚊帳に来て啼く青いすいつちよよ。

青いすいつちよの心では

戀せぬ昔のわたしと思ふらん、

さびしい、さびしい女と思ふらん。

思へば、和泉の國にて聞いた其聲も、

今聞く聲も變りなく、
ささくな、世づかぬ小娘の青いすいつちよよ。

青いすいつちよよ、

青いすいつちよは何ぞ啼きさして黙るぞ。

わたしの外の聞き慣れぬ男の氣息に羞らふか。

やつれの見えるわたしの頬、

わたしの髪をじつと見て、虫の心も咽んだか。

青いすいつちよよ、

何も歎くな、驚くな、わたしは凡て幸福だ……

いざ、今日此頃を語りなん、

来てとまれ、

わたしの左の白い腕を借さうほどに。

XXVIII

善しと人の褒むる物事の裏に、

偽と慢心と嫉妬と潜む、

そは醜き不純の光なり。

我は身を投げてあらゆる罪惡と悔恨と耻辱とに抱かれまし、

その隠れて徐ろにあらはるるものほど、

遠空の星の永久に輝く如く、

純金の錆びず、金剛石の透きとほるが如く、

いつ見ても活活として美しく好ましきかな。

あだし人のそを罵るも素直に罵るなれば亦美しくし。

彩色硝子の高さ窓を半ひらき、
 引きしぼりたる印度更紗の窓掛の下に、
 下町の煙突の煤煙を見下しつつ、
 小やかな輕き朝飯のあとに若き貴女の弾くピアノの一曲
 東京の二月の空は曇れども、
 若き貴女の心に綠さす
 明るき若葉の夏の色、戀の色、生の色……

過ぎこし方を思へば空わたる月の如く、
 流るる星の如くなりき。
 行方定めぬ身をば歎かじ、
 わが道は明日も弧を描かん、
 踊りつつ行かん、
 曳くひかり水色の長き裳の如くならん。

藝術はわれを此處まで導きぬ。
今こそ云はめ、
われ藝術を彼處に伴ひ行かまし、
より物質的に、より藝術的なる處へと。

われは軛となりて挽かれ、
駿足の馬となりて挽き、
車となりてわれを運ぶ。
わが名は「眞實」なれど、
「力」と呼ぶこそすべてなれ。

XXXIII

まはれ、まはれ、走馬燈……
走馬燈は幾たびまはればとて、
曲もなき、同じふやけし馬の繪なれど、
猶まはれ、まはれ——まはらぬは淋しきを。

桂氏の馬は西園寺氏の馬に
今こそまはりゆくなれ——まはれ、まはれ。

XXXIV

米の値の例なくも昂りければ、
わが貧しき十人の家族は麥を食ふ。
子供等は麥を嫌ひて
「お米の御飯を」と叫べり。
麥を粟に、また稗に改むれど、
なほ子供等は「お米の御飯を」と叫べり。
子供等を何と叱らん、
母も年若くして心には米を好めば……

「部下の遺族をして窮する者無からしめ給はんことを。
我が念頭に懸るもの之あるのみ」と、
佐久間大尉の遺書を思ひて今更に心咽ばるる。

XXXV

葡萄の秋の空を仰げば、
初めて斯かるみづみづしき空を見たる心地す。

われ今日まで何をしてありけん、
厨と書齋に在りしことの寂しきを知らざりしかな。
わが心今更の如く解かれたるを感ず。

葡萄いろの秋の空は露にうるほふ、
斯かる日にあはれ田舎へ行かまし。
そこに掘りたての里芋を煮る吊鍋の湯氣を嗅ぎ、

そこにて尻尾ふる百舌の甲高なる叫びを聞き、
そこにて刈稻を積み歸る牛と馬とを眺め、
そこにて鳥兜と野菊と赤き蓼とを摘まばや。

葡萄のいろの秋の空はまた田舎の朝によるし。

砂川の板橋の上に片われ月しろく残り、

「川魚御料理」の家は未だ寝たれど、

百姓屋の軒毎に立つる朝食の煙は

街道の丈高き櫂の並木に迷ひ、

粗する石臼の音近所隣にごろごろとゆるぎ初

むれば、

「とつちやん」と小さ末娘に呼ばれて、門先の井戸

の許に鎌磨ぐ老爺もあり。

かかる時、たとへば澁谷の道玄坂の如く、

突きあたりて曲る、行手の見えざる廣き坂を、

今結びし藁鞋の紐の切目すがすがしく、

男も女も脚絆して足早に上りゆく旅姿こそを

かしからめ。

葡萄ぶどういろの秋あきの空そらの、されど又またさびしきよ。
われを父ちち母ははありし故郷ふるさとの幼心こころに返かへし、
戀こひしらぬ素直すなはなる處女じよの如ごとくにし、
中なか六番町むつばんちやうの庭にわの無花果むげんかの木きの下もと、
手てを組くみて云いひ知らぬ淡あはき愁うれひに立たしめぬ、
おそらくは此朝このあさの無花果むげんかのしづくよ、すべて涙なみだ
ならん。

XXXVI

とん、とん、とんと足拍子あしびやうし、
洞ほらを踏ふむよな足拍子あしびやうし……
つひ嬉うれしさに、秋あきの日の
長ながい廊下らうかを走はつたが、
何處どこをどう行いき、どう探さがし、
何どうして採とつたか覺おぼえねど、
わたしの袂たもとに入まつてた、
さちがひ茄子なすと笑わらひ茸たけのこ……
わたしは夢ゆめを見て居ゐるか、

もう氣ちがひになつたのか、
あれ、あれ、四方が火になつた。
わたしはくくと笑ひ崩れる。

XXXVII

茜あかねと云ふ草の葉を搾つて
臘ろう脂しはいつでも採るとばかり、
わたしは今日まで思つてた。
鏡かがみ物ものからもよい臘ろう脂しは採れるのに。
そんな事はどうでもよい、
わたしは大事の大事を忘れてた、
わたしの夢からも、
こんな真ま赤あかな臘ろう脂しが採れる。

「秋」は薄手のさかづきか、

ちんからりと杯洗に觸れて沈むよな虫が啼く。

「秋」は妹の洋傘か、

さやしな細柄の玉の上明るくクリイム色の目があたる。

さてまた「秋」は二十二三の今様づくり、

青みを帯びたお納戸の著丈すらりと……

白茶地に金糸の多い式紙がた、唐織の帯もまばゆく……

園遊會の片隅のいたや紅葉の蔭を行き、

少し伏目にまつ白な菊の花壇をじつと見る。

それから後ろのわたしと顔を見合せて、

「まあいい所で」と走り寄り、

「どうしてそんなに痩せた」と、

十歳の時別れた姉の様な物言ひは、

優しい、うれしい秋だこと。

女三越の賣り出しに行きて、

寄切の前にのみひと日ありき。

歸りきて、かくと云へば、

男はひとり棋盤に向ひて

五目並のみ稽古してありしと云ふ。

(零と零と合せたる今日の日の空しさよ。)

さて男は疲れて黙し、又語らず、

女も終に買物を語らざりき。

その買ひて歸れるは唯だ高浪織の帯の片側に過ぎざれど……

それは細き麥稈、

しやぼん玉を吹くによけれど、竿とはし難し、

まして、まして柱とは。

されど麥稈も束として火を點くれば、

ゆゆしくも家を焼く。

わが幼児は賢し、

束とはせず、しやぼん玉を吹いて歩くよ。

退船の銅鑼いま鳴り渡り、
 見送の人人君を圍めり。
 君は忙しげに人人と手を握る。
 われは泣かんとはづむ心の毬を辛くも抑へ、
 人人の中を脱けて小走りに、
 うしろの甲板に隠るれば、
 波より射返す白きひかり墓地の如し。

この二三分……四五分の淋しさ、

われ一人のけ者の如し、
 君と人人とのみ笑ひさざめく。
 恐らく遠く行く旅の身は君ならで、
 この淋しき、淋しき我ならん。

退船の銅鑼は又ひびく。
 惨酷に、されど又痛快に、
 わが一人とり残されし冷たき心を苛むその銅鑼……

込み合へる人人に促され押され、慰められ、
 我は力なき毬の如くふらふらと船を下る。

乗^のり移^{うつ}りし小^こ蒸^{じょう}汽^きより見^み上^あぐれば、
今^{いま}更^{さら}に熱^{あつ}田^た丸^{まる}の船^{ふね}梯^{はし}子^ごの高^{たか}さよ。
ああ君^{きみ}と我^{われ}とは早^{はや}くも千^{せん}里^り萬^{ばん}里^りの差^さ……

わが小^こ蒸^{じょう}汽^きは堪^たへかねし如^{ごと}く終^{つひ}に啜^すり泣^なく……
一^{いつ}聲^{せい}、二^に聲^{せい}……

千^{せん}百^{ひゃく}の悲^ひ鳴^{めい}をほつと吐^と息^{いき}に換^かへ、

「ああなつかしや」と心^{こころ}細^{ほそ}きわが魂^{たましひ}の、
臨^{いま}終^はの念^{ねん}の如^{ごと}くに打^{うち}洩^{さら}す熱^{あつ}き涙^{なみだ}の白^{はく}金^{きん}の幾^{いく}滴^{てき}……

君^{きみ}が船^{ふね}は無^む言^{ごん}のままに港^{みなと}を出^いづ。

人^{ひと}人^{ひと}は叫^{まひ}びかはせど、
かなたに立^たてる君^{きみ}と此^{こゝ}處^ちに坐^{すわ}れる我^{われ}とは、
静^{しず}かに、静^{しず}かに、二^{ふた}つの石^{いし}像^{ざう}の如^{ごと}く別^{わか}れゆく……

(一九一一年十一月十一日神戸にて)

わが夫の君海に泛びて去りしより、
 わが見る夜毎の夢はたすべて海に泛ぶ。

或夜は黒きわたつみの上、

片手に亂るる裾をおさへて、素足のまま、

君が大船の舳先に立ち、

白き蠟燭の銀の光を高くさしかざせば、

滴る蠟のしづく涙と共に散りて、

黄なる睡蓮の花となり、又しるき鱗の魚となりぬ。

かかる夢見しは覺めたる後も清清し。

されど、又かなしきは或夜の夢なりき。

君が大船の窓の火や々に消えゆき、

唯だ一つ残れる最後の薄き光に、

われ外より硝子ごしにさし覗けば、

われならぬ面やつれせしわが影既に内にありて、

あはれ君が棺の前にさめざめと泣き伏すなり。

「われをも内に入れ給へ」と叫べど、

外は波風の音おどろしく、

内はうらうへに鉛の如く静かに重く冷たし。

泣けるわが影は

氷の如く霞の如く透きとほる影の身なれば、
わが聲を聴きわかぬにやあらん。

われは胸も裂くるばかり苛立ち、

扉の方より馳せ入らんと、

三たび五たび甲板の上を繞れど、

皆堅く鎖して入るべき口も無し。

もとの硝子窓に寄りて足ずりする時、

第三のわが影艦の方の渦巻く浪にまじり、

青白く長き手に抜き手きつて泳ぎつつ、

は、は、は、は、そは皆物好きなるわが夫の君の

われを試す戯れぞと笑ひき。
さめて後、われは其第三のわれを憎みて、日ひと日腹
だちぬ。

たそがれの路、
森の中に一すぢ……
呪はれた路、薄白き路、
雷の奥へ影となり遠ざかる、
あはれ死にゆく路。

うち沈みて静かな路。
もともと何の木である、
その枯れた裸の腕を挙げ、

小暗きかなしみの中に、
心疲れた路を見送る。

たそがれの路の別れに、樺の木と
櫟の森は気が狂れたらし、
あれ何響が返す幽かな吐息……
幽かな冷たい調子はづれの高笑ひ……
また幽かな啜り泣き……

蛋白石色の珠数珠の實の
頸飾を草の上に留め、

薄墨色の音せぬ古池を繞りて、
靄の奥へ影となりて遠ざかる、
あはれ、たそがれの森の路……

XIV

東京の正月の或日、
うれしくも戀しき人の手紙著さぬ。

「今わが船の行くは北緯一度の海、
白金色の月死せるが如く眞上の空に懸り、
甲板に立てる人皆陰影を曳かず。」

「印度洋の一千九百十一年
十二月二日の日の出の珍しさよ、美しくしさよ、

鮮^{あざやか}かな橄欖^{オリーブ}青^{アズキ}を混^まへし珍^{めづ}しさよ、華^{はな}やかさよ。」

「二十^にの旋風^{フウ}器^キは廻^まれども、

食堂^{シヤウ}のあひも變^{かは}らぬむし暑^{あつ}さ。

今宵^{イマ}も青玉^{エメラルド}色の長^{なが}い裾^{すそ}を曳^ひく

英吉利^{イギリス}西婦^{セイフ}人のミセス、ロオズが

人の目^めを惹^ひく話^{はなし}しぶり、

それに、流^{なが}れ渡^{わた}りの一人^{ひとり}もの、

素性^{ソジヤウ}の知^しれぬ諾威^{ノルウェー}人が氣^きを取^とられ、

果物^{くだもの}マンゴスチン^{マンゴスチン}を下^{した}手に割^われば、

指^{ゆび}もナフキンも紅^{あか}く染^そむ。」

かがることあまた書^かきて、

若^{わか}やかに跳^はれる旅人^{たびびと}の心^{こころ}うらやまし。

寒^{さむ}きかな、寒^{さむ}きかな、東京^{トウキョウ}は

曇^曇となりて今日^{けふ}も暮^くれゆく。

一切を要す、
 われは憧るる靈なり。
 物吝みなせそ、
 若し齋す物の猶ありとならば。――
 始めに取れる果實は年経れど紅し、
 われこそ物を損ぜずして愛づるすべを知るなれ。

「常に杖に依りて行く者は
 その杖を失ひし時自らをも失はん。
 われは我にて行かばや」とわれ語る。
 友は笑ひてさて言ひぬ。
 「な欺きそ、
 戀人の名を聞くだにも涙さしぐむは君ならずや。」

XLVII

古き物の猶權威ある世なりければ、
彼は日本の女にて東の隅にありき。
また彼は精錬せられざりしかば、
鑛の儘なりき。
みづからを黄金の質と知りながら…あなあはれ。

XLVIII

競馬の馬の打勝たんとする鋭さならで、
曲馬の馬は我を棄てし
服従の素速き氣轉なり。

曲馬の馬の瘦せたるは、
競馬の馬の逞しく美しくしき優形と異りぬ。
常に飢じきが爲。

競馬の馬もいと稀に鞭を受く。

されど寧ろ求めて鞭打たれ、その刺激に跳る。
曲馬の馬の爛れて癒ゆる間なき打傷と何れぞ。

競馬の馬と曲馬の馬と

偶々市の大通に行き會ひし時、
競馬の馬はその同族の墮落を見て涙ぐみぬ。

曲馬の馬は泣くべき暇も無し、

慳貪なる黒奴の曲馬師は
廣告のため、樂隊の囃しに伴れて彼を歩ませぬ……

XLIX

物を書きさし、思ひさし、
廣東蜜柑を剝いたれば、

藍と鬱金に染まる瓜。
江戸の昔に廣重の

名所づくしの繪を刷つた
版師の指は斯うもあらうか。

藍と鬱金に染まる瓜。

堅苦しく、うはべの律義を喜ぶ國、
 しかも、かるはづみなる移り氣の國、
 支那人ほどの根氣なくて、淺く利己主義なる國、
 阿メリカの富なくて、阿メリカ化する國、
 疑惑と戦慄とを感ぜざる國、
 男みな背を屈めて宿命論者となり行く國、
 めでたく、うら安く、萬萬歳の國。

髪かき上ぐる手ざはりが
 何やら温泉場に在るやうな
 軽い氣分にわたしをする。
 この間に手紙を書きませう、
 朝の書齋は凍れども、
 「君を思ふと巴里宛に。」

たそがれに似るうす明り――
二月の庭の木を透きて、
赤むらさきのびろうどの、
異國模様を滑る時。

たそがれに似るうす明り――
赤むらさきのびろうどの
窓掛に凭るわが肌を
夢となりつつ繞る時。

たそがれに似るうす明り――
朝湯あがりの身を斜に、
軽く項を抱きかかへ、
つくづく君を思ふ時。

女は有るかぎり
 粗刻の明治の女ばかり、
 只ひとりかの若い詩人が居て、
 今日けふの會くわいは引ひきたつ。
 永井荷風の書く如き
 叙情詩的な物云ひ、
 また歌麿の版畫の
 「上の息子」に似た身のこなし。
 それは誰れ……

わが小さい娘の髪を撫でるとき、
 なにかしら生れ故郷がおもはれる。
 母がこと亡き姉のこと伯母がこと、
 あれや、それ、とりとめも無い事ながら、
 片時は黄金の雨が降りかかる。

三月の晝のひかり
 わが書齋に這ふ藤むらさき……
 その中に光の顔の白、
 七瀬の帯の赤、
 机に掛けた布の脂色、
 みな生しく温かに……
 されど唯だ瓶の彼岸ざくらと、
 わが姿とは淡く寒し。
 君の久しく留守なれば

静物の如く我は在らん。

障子あくれば、うす明り――
 静かに暮れるたそがれに、
 をりをりまじる淡雪は
 錫箔よりもたよりなし。
 ほつれた髪にとりすがり、
 わたしの顔をさし覗く
 雪のころのさびしさよ、
 涙となつて融けてゆく。
 雪のころもさうである、

ましてわたしはなんとしませう。

たそがれ時か、あけがたか、
わたしの泣くのは決り無し。

蛋白色のあの空が

ふつと渦巻く海に見え、

波間にもがく白い手の、

老けたサッフオオ、死にきれぬ

若い心のサッフオオを

ありあり眺めて共に泣く。

また蛇が啼く晝さがり、

金の箔おく連翹と、

銀と翡翠の象篋の

丁字の花の香の中に、

熱い吐息をほつと吐く

若い吉三の前髪を

わたしの指は撫でながら、

微風の様に泣いて居る。



牛込見附の青い色……
わけて柳のさばき髪……
それが映つた濠の水……

柳の蔭のしつとりと
黒く濡れたる朝じめり……
垂れた柳とすれすれに
白い護謄輪の馳せ去れば、
あとに我子の靴の音……



XVIII

生 込 見 爾 の 青 い 色
 わ け て 柳 の さ ば き 髪
 そ れ が 映 つ た 後 の 水
 柳 の 蔭 の し つ と り と
 黒 く 濡 れ た る 朝 じ め り
 赤 れ た 柳 と す れ す れ に
 水 の 流 れ の 音 が 聞 こ える
 あ と の 心 の 影 の け が れ

黄色な電車を遣り過し、
見上げた高い神樂坂、
何やら軽く人込みに
気がおくれのするころよさ。

わが子の手からすと離れ、
風船玉が飛んで行く……
軒から軒へ揚り行く……

良人の留守の一人寝に、
 わたしは何を著て寝やう。
 日本にほんの女をんなのすべて著る
 じみな寝間著はみすぼらし、
 非人の姿死すがたしの下繪、
 わが子の前もけすさまじ。
 わたしは矢張りちりめんの
 夜明の色いゝの茜染あかねぞめ、

長襦袢ながじゆばんをば擇びましよ。
 重い狭霧おもひせうりがしつとりと
 花に降るよな肌はだざはり、
 女をんなに生れたしあはせも
 これを著るたび思はれる。

斜ななに裾曳すそひく長襦袢、
 つい解けかかる襟もとを
 軽く合せるその時は、
 何のあてなくあこがれて
 若さに逸るたましひを

じつと抑へる心もち

それに、わたしの好きなのは、
白蠟の灯にてらされた
夢見ごころの長襦袢、
この匂はしい明りゆゑ、
君なき間もみじろげば
息づむまでに艶かし。

兒等が寝すがた、今一度、
見まはしながら灯をば消し、

寒い二月の床のうへ、
こぼれる脛を裾に巻き、
つつましやに足曲げて、
夜著を被けば、可笑しくも
君を見初めたその頃の
娘ごころに歸りゆく。

旅の良人も今ごろは
巴里の宿のまどろみに、
極樂鳥の姿する
わたしを夢に見て居るか。

わたしはあまりに気が滅入る。
なんの自分を案じましょ、
君を戀しと思ひ過ぎ、
引き立ち過ぎて気が滅入る。

初戀の日は歸らずと、
わたしの戀の大琴に
その弾き歌は用が無い。
昔にまさる燃える氣息……

昔にまさるため涙……
人目をつつむ苦しさに、
鳴りを沈めた琴のいと、
じつと哀しく張り詰める。

巴里の大路を行く君は
わたしの外に在るとても、
わたしは君の外に無い、
君の外には世さへ無い。

君よ、わたしの遺瀨なさ……
三月待つ間に身が細り、
四月の今日は狂ひ死に
するかとばかり気が滅入る。

人並ならぬ戀すれば、
人並ならぬ物おもひ……
其れもわたしの幸福と
思ひ返せど気が滅入る。

昨日の戀は朝の戀、

またのどかなる晝の戀。
今日する戀は狂ほしい
真赤な入日の一さかり。

とは思へども気が滅入る。
若しも其儘旅に居て
君歸らずばなんとせう。
わたしの胸は今裂ける。

LXI

眞赤な花のいく盛り—
透きとほつたる眞紅から、
うす紫を少し帯び、
さては、ほんのり上白み、
また物恨むしつこさの
黒味に移るいく盛り—
君よ、棄ておくこと勿れ、
眞赤な花が泣くものを。

LXII

押しやれども、
またしても膝に上る黒猫……
生きた天鷲絨よ、
憎からぬ黒猫の艶めく手ざはり。
ねむたげな黒猫の目、
その奥から射る野性のちから。

衣い桁かぎの帯おびからこぼれる
艶なまめいた晝ひるの光ひかりの肉色にくいろ……
その下に黒くろ猫ねこは目め覚さめて、
あれ、思おもふ存ぞん分ぶん伸のびをする。
この世界せかいをわが物のこころもち……

LXIII

どらした機はた會あひやら、折を折く、
緑りき金ごんに光ひかりるわが膝ひざの黒くろ猫ねこ……

打つ眞似をすれば、
尾を立てて後しざる黒猫、
まんまろく、かはゆく……
しかし、わたしの手は
錫箔のやうに薄く冷く閃いた。
お厭な。

跣足で歩いた粗樸な代の人が
石笛を戀の合圖に吹くよな雲雀、
九段の坂を上るとて
鳥屋の軒で啼く雲雀、それを聞けば、
わたしの二人の子を預けて置く
玉川在の瑠璃色の空で啼いた雲雀が
薄くらがりの麥畑で
村のわんぱくに捕られたのぢや無いか。
から鳥屋で育つた雲雀と知りながら、

五町ごちやうすぎ、七町しちちやうすぎ、
うちの門かどまで氣きに掛かる雲雀ぼり。

LXVI

春はるが來きた。
せまい庭にほにも日ひがあたり、
張はり物ものの板いたの紅べに絹ぬいのきれ、
立たつ陽かげ炎えんも身みをそそる。

春はるが來きた。
亞あ鉛たんの屋や根ねに、ちよちよと、
妻つまに焦これて、まんまるな
ふくら雀すずめもよい形かたち。

春が来た。
遠い旅路の良人から
使に來たか、見に來たか、
わたしを泣かせに唯だ來たか。

春が来た。
朝の汗にきりきざむ
露の臺にも春が來た、
青いかなしい春が來た。

LXVII

ちぎれちぎれの雲見れば、
風ある空もむしやくしやと
むか腹立てて泣きたいか。

さう云ふ間にも粒なみだ
泣いて心が直るよに、
春の日の入り、臙脂さした
よい目元から降りかかる。

ぬらせ、ぬらせ、
ぬらせ、ぬらせ、
わが髪ぬらせ、通り雨。

LXVIII

二夜三夜こそまる寝もよろし。
君なき寢屋へ入るとせず、
椅子ある居間の月あかり、
黄ざくら色の衣を著て、
つつましやかなうたた臥し、
まだ見る夢はありながら、
うらなく明くる春のみじか夜。

赤くぼかした八重ざくら、
 その蔭ゆけば、ほんのりと、
 歌舞伎芝居に見るやうな
 江戸の明りが顔にさし、
 ひと枝折ればむすめ氣の……
 おもはゆながら絃につれ
 何か一さし舞ひたけれ。
 さてまた、小雨ふりつづき、

目を泣き脹す八重ざくら、
 その散りがたの艶めけば、
 豊國の繪にあるやうな、
 縞子の黒味のおちついた
 むかしの帯をさゆうと締め、
 身もしなやかに眺めばや。

久しき留守に倚りかかる、
君が手なれの竹の椅子。
とる針よりも、糸よりも、
女ごころのかぼそさよ。

膝になびいた一ひらの
江戸紫に置く刺繡は、
ひまなく戀に燃える血の
真赤な胸の罌粟の花。

花に添ひたる海の色、
ふかみどりなる罌粟の葉は
君が越えたる浪形に
流れて落ちるわが涙。

さは云へ、女のたのしみは
わが繡ふ罌粟の夢にさへ
花をば揺る風に似て
君が呼吸こそ通ふなれ。

虞美人草の散るままに、
淫れた風も肩先を
深く斬られて血を浴びる。

虞美人草の散るままに、
烟は火焰の渠となり、
入日の海へ流れ行く。

虞美人草も、わが戀も、

ああ散るままに、散るままに、
散るままにこそまばゆけれ。

散りがたの赤むらさきの牡丹の花、
 青磁の大鉢の中に微かにそよぐ。
 狭なるむだづかひの終りに
 早くも迫る苦しき日の怖れを回避する心もち……
 ええ、よし、それもよし。

女は王よりもよるづ贅澤に、
 世界の香料と、貴金属と、寶石と、
 花と、絹布とは女こそ使用ふなれ。
 女の心臓のかよわる血の花弁の旋律は
 ワグネルの音楽のどの傑作にも勝り、
 湯殿に隠りて素肌のまま足の爪切る時すら、
 女の誇りに印度の佛も知らぬほくそゑみあり。
 言ひ寄る男をつれなく過す自由も

女に許されたる樂しき特權にして、
相手の男の相場に負けて破産する日も、
女は猶戀の小唄を口吟みて男ごころを和ぐ。
たとへ放火殺人の大罪にて監獄に入るとも、
男の如く二分刈とならず、黒髪は墓のあなたまで浪打ちぬ。
婦人運動を排する諸聲の如何に高ければとて、
女は何時まで新しきゲエテ、カント、ニウトンを生み、
人間は永久うらわかき母の慈愛に育ちゆく。
女、女、日本の女よ、
いざ諸共に自らを知らまし。

LXXIV

西洋蠟燭の大石よりも白きを硝子の鉢に燃し、
夜更くるまで黒檀の卓に物書けば幸福多きかな。
あはれこの梔花色の明りこそ
咲く花の如き命を包む想像の狭霧なれ。

これらを思へば晝は詩人の領ならず、
天の日は詩人の光ならず、
蓋し阿弗利加を沙漠にしたる悪しき熱の氣息のみ。

うれしきは夢と眩惑と暗示とに富める白蠟の明り。
この明りの中に五感と頭脳とを越え、
全身をもて嗅ぎ、觸れ、知る刹那――
一切と個性とのいみじき調和、
理想の實現せらるる刹那は來り、
ニイチエの「夜の歌」の中なる「總ての泉」の如く、
わが歌は盛高になみなみと逆る。

LXXV

わたしの庭の「かくれみの」
常緑樹ながらいたましや、
時も時とて、朱萸にさへ、
積穀にさへ花の咲く
夏の初めにいたましや、
みどりの枝のそこかしこ、
たまたまひと葉二葉づつ
日毎に目立つ濃い鬱金、
若い白髪を見るやうに

染めて落ちるがいたましや。
わたしの庭の「かくれみの」
見ては泣くのが悪かるか。

LXXVI

初夏が来た、初夏は
髪をきれいに梳き分けた
十六七の美少年。
さくら色した肉附に、
ようも似合うた詰襟の
みどりの上衣、しろづぼん、
初夏が来た、初夏は
青い焔を沸き立たす

南みなみの海うみの精せいである。
さやしな前まへ齒ばに麥むぎの莖くき
ちよいと嚙かみ切り吹ふく笛ふえも
つつみ難がたない火ひの調しら子し。

初はつ夏ちかが來きた、初はつ夏ちかは
ほそいづぼんに、赤あかい靴くつ、
杖つゑを振かり振かり驅かけて來きた。
そよろと匂におふ追お風かぜに、
積つ穀こくの若わか芽め、けしのはな、
青あお梅うめの實みも身みをゆする。

初はつ夏ちかが來きた、初はつ夏ちかは
五ご行ぎやうばかりの新あたらしい
戀こひの小こ唄うたをくちずさみ、
女おんなの呼い吸きのする窓まどへ、
物ものを思おもへと、蒼あさ白しろい
百ひゃく合ごうの陰かげ翳かげをば投なげに來きた。

LXXVII

崖の上なる教會の
古びた壁の脂の色、
常に静かてよけれども、
高い庇の陰にある
圓い小窓の摺硝子、
誰やら一人うるみ目に
空を見上げて泣くやうな、
それが淋しく氣にかか

LXXVIII

黄と、紅と、みどり、
生な色どり、
飴細工のやうなチュウリップの花よ、葉よ。
それを活ける白い磁の鉢、
きしやな女の手、
た、た、た、と注す水のおと。
ああ、なんと生々した晝である。
飴細工のやうなチュウリップの花よ、葉よ。

阜月なかばの晴れた日に、
氣早い蟬が一つ啼く。
何とて啼いたか知らねども、
森の若葉はその日から
火を吐くやうな息をする。

君の心は知らねども...

蛇のうなりか、わが髪に
觸れて呼吸つくそよ風か、
遠い木魂か、噴水か、
をりをり斯んな聲がする。
「君もわたしも出来るだけ
物の中身を吸ひませう。
今日のよるこび、行くすゑの
夢のかぎりを盡しませう。」

ああさみだれよ、昨日まで、
そなたを憎いと思つてた。
魔障の雲がはびこつて
地を亡ぼそと降るやうに。

もし、さみだれが世に絶えて
唯だ乾く日のつづきなば、
都も、山も、花園も、
サハラサハラの砂砂となるである。

戀を命とする身には
涙の添ひてうらがなし。
空を戀路にたとへなば
そのさみだれはため涙。

降れ、しとしと、しとしと、
赤をまじへた、温かい
黒の中から、さみだれよ、
網形あみかたに引け、銀の絲。

ああ、さみだれよ、そなたのみ――
わが名も骨も朽ちる日に、
埋れた墓を洗ひ出し、
涙の手もて拭ふのは。

LXXXII

うすく紅さす百合の花、
ひと花づつを、朝ごとに
開けば、どうやら、わが頼む
よい幸福はまのあたり……

うすく紅さす百合の花、
ひと花づつを、朝ごとに
散らせば、あたり、わが夢も
しばし香りて消えて行く。

うすく紅さす百合の花、
よし幸福でないとても、
またかりそめの夢とても、
わたしは花をじつと嗅ぐ。

LXXXIII

若い娘の言ふことに、
「別れを述べる時が来た、
美しくしい花にほふ花、
わたしの無垢な日送りに、
さびしい友であつた花、
今日までわたしを慰めた
やさしい花のかずかずに、
別れを述べる時が来た。
花の神様さようなら。」

わたしは愛の神様に
手をば執られて参りましょ。

若い娘の言ふことに、
別れを述べる時が来た、
美しくしい花にほふ花。
彌生に代る初夏の
青い海から吹いて来る
五月の風に似た男、
若い、やさしい、あたたかな、
生々としたあの男、

男の中の花男、
すべての花に打勝つて、
その目にわたしを引附けた。

若い娘の言ふことに、
別れを述べる時が来た、
美しくしい花にほふ花。
おお、その上に、よい聲で、
いつもわたしを呼び慣れた
赤い小鳥よ、そなたにも、
別れを述べる時が来た、

どれどれ籠かごから放はなしましよ。
濟すまないながら、今日けふからは、
燃もえた、やさしいくちびるの
外ほかに聞ききたい聲こゑもない。」

LXXXIV

臺所だいどころの闕しきに腰こしすゑた
古洋服こやうふくの酔よつばらひ、
そつとしてお置おきよ、追おはずにね。
物ものもらひとは勿な體たいな……
髪かみの亂みだれも、蒼あをい目めも、
パウドレパウドレエルエルに似にてるわね。

若い娘の言ふことに、

「雲雀よ、雲雀、

そなたは空で誰を喚ぶ。

——それは何うでもよいわいな——

わたしは君の名をば喚ぶ。

晝は百たび、

夜は二百たび。」

若い娘の言ふことに、

「あれ、あの青い

空であらうか、君の名は。

——それに違ひがないわいな——

ひとり小聲で喚ぶたびに、

沈んだ心も、

しんど高くなる。」

若い娘の言ふことに、

「また、あの燃える

お日様である、君が名は。

——さうでないとは誰が言はう——

わたしの心を眩暈させ、
熱い吐息を
投げぬ間もない。」

若い娘の言ふことに、

「ああ、君が名を

喚ぶと云うても口の中、

——それを何うして君が知る——

自分が喚んで聴くばかり。

雲雀よ、雲雀、

音の高い雲雀。」

LXXXVI

つやなき髪に焼鏝を

誰が當てよとは言はねども、

はずみごころに縮らせば、

焼けてほろほろ膝に散り、

半うしなふ前髪の

くちをし、悲し、あぢきなし。

あはれと思へ、三十路へて

なほ人戀ふる女の身。

狛の斑は刺青か、
短気な蝶が来る。
今日の入日のかなしさよ。
思ひなしかは知らねども、
短気な蝶が来る。

濱の日の出の空見れば、
茜木綿の幕を張り、
静かな海に敷きつめた
廣重の繪の水淺葱。
(それもわたしのおもひなし、)
あちらを向いた黒い鳥。

わたしの上を掠めて通らぬ雲ならば、
 勝手に曇れ、
 勝手に渦巻け、
 わたしの足もとの遠い雲。
 憎悪の風に、
 愚癡のしぶき雨、
 嘲りの霰をまじへた、
 低い低い通り雲。

わたしの上には、水色の
 ひろい空、日輪の金の點。
 けれど、なんだか氣に掛る、
 あれ、あの地平線に見えるのは
 不安な黒い雲の羽。
 それとも、わたしに二度歸る
 空飛ぶ馬の持つ羽か。
 けれど、なんだか氣に掛る。

いざ、天の日はわがために
黄金の車を輾らせよ。
颯風の羽は東より
いざこころよく我を追へ。

黄泉の底まで泣きながら、
頼む男を尋ねたる
その昔にもえや劣る。
女の戀のせつなさよ。

品子やものに狂ふらん、
燃ゆるわが火を抱きながら、
天がけり行く、西へ行く。
巴里の君へ逢ひに行く。

あはれならずや、その雛を
 荒巖の上の巢に遺し、
 戀しき兄鷹を尋ねんと、
 颯風の空に下りながら、
 雛の啼く音にためらへる
 若き女鷹の若しあらば—
 それは窠れて遠く行く
 今日の出のわがこころ。
 いとしき子等よ、ゆるせかし、

しばし待てかし、わかき日を
 猶夢にみるこの母は
 汝が父をこそ頼むなれ。

水に渴えた白緑の
ひろい麥生を、すと斜に
翔る燕のあわてるもの、
何の使に急ぐのか、
よるこびあまる身のこなし。

續いて、さつと、またさつと、
生あたたかい南風
ロアルを越して吹く度に、

白楊の樹がさわさわと
待つてゐたよに身を揺る。

河底にゐた家鴨等は
岸へ上つて、アカシヤの
蔭にがやがや啼きわめき、
燕は遠く去つたのか、
もう麥畑に影も無い、

それは皆皆よい知らせ、
暫くの間、風に止み、

雨が降る、降る、ほそぼそと
金の糸やら絹の糸、
真珠の糸の雨が降る。

嬉しや、これが佛蘭西の
雨にわたしの濡れ初め。
軽い婦人服に、さやしやな靴、
ツウルの野邊の雛罌粟の
赤い小路を君と行き。

濡れよとままよ、濡れたらば、

わたしの帽のチウリップ
いつそ色をば増しませう、
増さずば捨てて代りには
野にある花を摘んで挿そ。

そして昔のカセドラル
あの下蔭で休みましよ。
雨が降る、降る、ほそぼそと
金の糸やら絹の糸、
真珠の糸の雨が降る。

(ロアルは佛蘭西南部の河の名なり。)

ほんにセエヌ川よ、いつ見ても
灰がかりたる浅みとり……
陰影に隠れたうすものか、
泣いた夜明の黒髪か。

いいえ、セエヌ川は泣きませぬ。
橋から覗くわたしこそ
旅にやつれたわたしこそ……

あれ、じつと、紅玉の涙のにじむこと……
船にも岸にも灯がともる。
セエヌ川よ、
やつぱりそなたも泣いてゐる、
女ごころのセエヌ川……

眞赤な土が照り返す
 だらだら阪の二側に、
 アカシヤの樹のつづく路。

あれ、あの森の右の方、
 餡色をして屋根と屋根、
 あの間から群青を
 ちらと抹つたセエヌ川……

涼しい風が吹いて来る、
 マロニエの香と水の香と。

これが日本の畑なら
 青い「ぎいす」が鳴くである。
 黄ばんだ麥と籾粟と、
 黄金に交ぜたる朱の赤さ。

誰が挽き捨てた荷車か、
 眠い目をして、路ばたに
 じつと立つたる馬の影。

「MONSIEUR KODIN の別荘は。」

問ふ二人より、側に立つ

KIMONO 姿のわたしをば

不思議と見入る田舎人。

「ムシユウ・ロダンの別荘は、

ただ真直に行きなさい、

木の間から、その庭の

風見車が見えませう。」

巴里から来た三人の

胸は俄かにときめいた。

アカシヤの樹のつづく路。

空をかき裂く羽の音……
 今日も飛行機が漕いで来る。
 巴里の上を一すぢに、
 モンマルトルへ漕いで来る。

ちよいと望遠鏡をわたしにも……
 一人は女です……笑つてる……
 アカシヤの枝が邪魔をする……

何處へ行くのか知らねども、
 毎日飛べば大空の
 青い眺めも淋しかる。

かき消えて行く飛行機の
 夏の日中の羽の音……

あれ、あれ、通る、飛行機が
 今日も巴里をすぢかひに、
 風切る音をふるはせて、
 身軽なこなし、高高と
 羽をひろげたよい形。

オペラ眼鏡を目にあてて、
 空を踏まへた膽太の
 若い乗手を見上ぐれば、

少し捻つた機體から
 さらりと反射の金が散る。

若い乗手のいさましさ、
 後ろを見捨て、死を忘れ。
 片時やまぬ新らしい
 方となつて飛んで行く、
 前へ、未來へ、ましぐらに。

(一)

閻を内へ跨ぐとき、
墓窟の口を踏むやうな
暗い怖えが身に迫る。

煙草のけぶり、人いきれ、
酒類の匂ひ、灯の明り、
黒と桃色、黄と青と……

あれ、はたはたと手の音が
さもの姿に帽を著た
わたしを迎へて爆ぜ裂ける。

鬼のむれかと想はれる
人の塊、そこかしこ。
もやもや曇る狭い室。

(二)

淡い眩暈のするままに

君が腕を軽く取り、
物珍らしくさし覗く
知らぬ人等に會釋して、
扇で半ば頬を隠し、
わたしは其處に掛けて居た。

パウドレエルに似た像が
荒い苦悶を食ひばり、
手を後ろ手に縛られて
煤びた壁に吊された、
その足もとの横長い

粗木づくりの腰掛に。

(三)

「この酒場の名物は、
四百年へた古家の
きたないことと、飄軽な
また正直なあの老爺、
それにお客は漫画家と
若い詩人に限ること。」
こんな話を友はする。

(四)
潤い股衣の大股に
老爺は寄つて、三人の
日本の客の手を取つた。
伸びるがままに亂れたる
髪も頬髭も灰白み、
赤い上被、青い服、
それ目も汚れて裂けたまま。
太い目に皺の寄る
屈托のない笑顔して、
盛高の頬と鼻先の

林檎色した美しくしさ。

老爺の手から、前の卓、
わたしの小さい杯に
注がれた酒はムウドンの
丘の上から初秋の
セエヌの水を見るやうな
濃い紫を湛へてた。

(五)

「聽け、我が子等」と客達を

叱るやうなる叫びごゑ。

老爺はやをら中央の
麥程椅子に掛けながら、
マンドリンをば膝にして、

「皆さん、今夜は珍しい

日本の詩人をもてなして、
エルレエヌをば歌ひましょ。」

老爺の聲の止まぬ間に

拍手の音が降りかかる。

赤い毛をした瘦形の
モデル女も泳ぐよに
一人の畫家の膝を下り、
口笛を吹く、手を舉げて。

(巴里モンマルトルの「暗殺の酒場」にて)

知らざりしかな、昨日まで、
わが悲みをわが物と。
あまりに君にかかはりて。

君の笑む日をまのあたり
巴里の街に見る我の
あはれ何とて淋しきか。

君が心は跳れども、

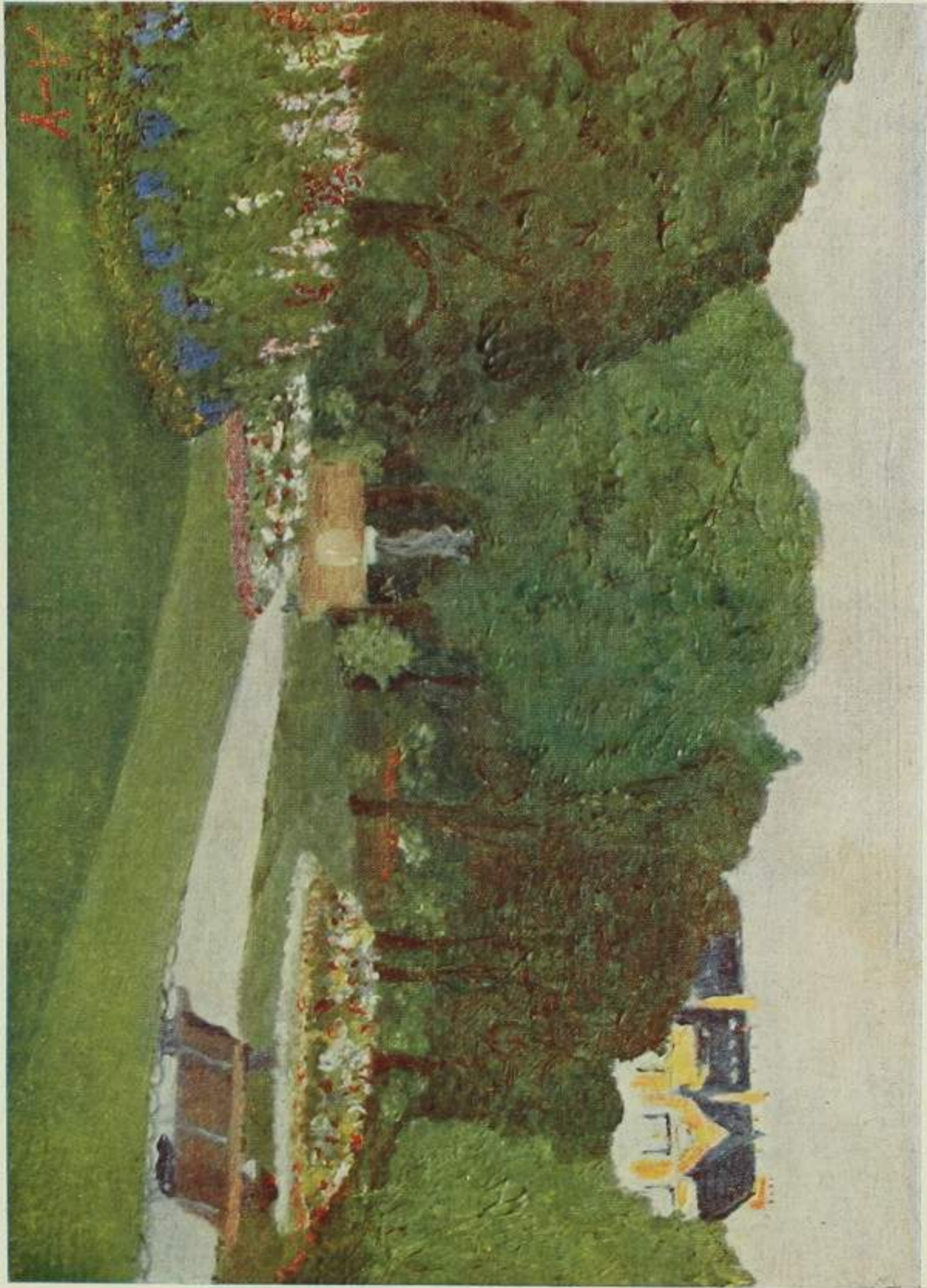
わが熱かりし火は濡れて、
自らを泣く時きたる。

わが聞く樂はしほたれぬ、
わが見る薔薇はうす白し、
わが執る酒は酢に似たり。

ああ、わが心已む間なく、
東の空にとどめこし
我子のの上に歸りゆく。



君は何かを讀みながら、
マロニエの樹の染み出した
斜な徑を花の香の
濡れて呼吸つく方へ去り、
わたしは毛櫛の大木の
しだれた枝に目を避けて、
五色の糸を卷いたよな
圓い花壇を左にし、
少しはなれた紫の



少い花はなれた紫の
 五色の緑を帯いたよな
 しだれた枝に日を避けて
 わたしは毛櫛の大木の
 濡れて呼吸をつく方へ去り
 斜な徑を花の香の
 マローの樹の葉み出した
 静かな何かを讀みながら

木立と、青い水のよに
ひろがる芝を前にして、
繪具の箱を開けた時、

お、お、雀、雀、

一つ寄り、

二つ寄り、

はら、はら、はらと、

十、二十、數知れず、

さやしやな黄色の椅子の前、

わたしへ向いて寄る雀。

それ、お食べ、
それ、お食べ、
今日もわたしは用意して、
麵麩とお米を持って来た。

それ、お食べ、
雀、雀、雀たち、
聖母の前の鳩のよに、
素直なかはいい雀たち。
わたしは國に居た時に、

朝起きても筆、
夜が更けても筆、
祭も、日曜も、春秋も、
休む間なしに筆とつて、
小鳥に餌をば遣るやうな
氣安い時を有たなんだ。
お、美しくしく圓い脊と
小さい頭とくちばしが
わたしへ向いて並ぶこと。
見れば何れも子の様な、

わたしの忘れぬ子の様な……
わたしは小聲で呼びませう、
それ光さん、

かはいい七ちゃん、

秀さん、麟坊さん、八峰さん……

あれ、まあ挙げた手に怖れ、

逃げる一つのあの雀、

お前は里に居た爲めに

親になじまぬ佐保ちゃんか。

わたしは何か云つて居た、

気が狂ふので無いか知ら……
どうして氣安いことがある、
ああ、氣に掛る氣に掛る、
子供の事が又しても……

せはしい日本の日送りも
心ならずも執る筆も、
身の衰へも、わが髪も
早く落ちるも皆子ゆゑ。

子供を忘れ、身を忘れ、

こんな旅寝をはるばると
思ひ立つたは何ゆゑか。
子をば育む大切な
母のわたしの時間から、
雀に餌をばやる暇を
偷みに来たは何ゆゑか。

うっかりと君が言葉に絆されて……

いいえ、いいえ、

みんなわたしの心から……

あれ、雀が飛んでしまつた。

それはあなたのせいでした。
みんな、みんな、雀が飛んで仕舞ひました。

あなた、わたしは何うしても
先に日本へ歸ります。
もう、もう繪なんか描きません。

雀、雀、

モンソオ公園の雀、

そなたに餌をも遣りません。

C

わが知れる一柱の神の御名を讀へまつる。
あはれ缺けざることなき「孤獨清貧」の御靈、
グレンドウの命よ。

グレンドウの命にも著け給ふ衣あり。
よれよれの皺の波、酒染の雲、
煙草の焼痕の霞模様。

もとより瘦せに瘦せ給へば、

衣を透して乾物の如く骨だちぬ。
背丈の高きは冬の老木のむきだしなる如し。

グレンドウの命の顛顛は音楽なり、
断えず不思議なる何事かを弾きぬ。
どす黒く青き筋肉の蛇の節廻し……

わが知れる藝術家の集りて、
女と酒とのある處、
グレンドウの命必ず暴風の如く來りて罵り給ふ。

何處より來給ふや、知り難し、
一所不住の神なり、
さちがひ茄子の夢の如く過ぎ給ふ神なり。

グレンドウの命の御言葉の荒さよ。
人皆その眷屬の如くないがしるに呼ばれながら、
猶この神と笑ひ興ずるを喜びぬ。

あれ、あれ、あれ、
 後から後からとのし掛つて、
 ぐいぐいと喉元を締める
 凡俗の生の壓迫……
 心は氣息を次ぐ間もなく、
 どうすればいいかと
 唯だ右ひだりへうろろ……

もう之が癖になつた心は、

大やうな初心な、
 時には迂濶らしくも見えた、
 あの好いたらしい様子を丸で失ひ、
 氷のやうに冴えた
 細身の双先を苛苛と
 ふだんに尖らす冷たさ。

そして心は見えて見ぬ振……
 凡俗の生の壓迫に
 思ひきりぶつ突かつて、
 思ひきり撥ねとばされ、

ばつたり壓しへされた
これ、この無惨な蛙を
わたしの青白い肉を。

けれど蛙は死なない、
びくびくと顫ひつづけ、
次の刹那に
もう直ぐ前へ一歩、一歩、
裂けてはみ出した腸を
両手で抱きかかへて跳ぶ、跳ぶ。
そして此人間の蛙からは血が滴れる。

でも猶心は見えて見ぬ振……
泣かうにも涙が断れた、
叫ばうにも聲が立たぬ。
乾いた心の唇をじつと噛みしめ、
黙つて唯だうろろと腕くのは、
人形だ、人形だ、
苦痛の弾機の上に乗つた人形だ。

被^め眼^か布^ししたる女^{をんな}にて我^わがありしを、
 その被^め眼^か布^しは却^{かへ}りて我^われに
 奇^くしき光^{ひかり}を導^{みちび}き、
 よく物^{もの}を透^ほして見^みせつるを、
 我^わが行^ゆく方^{かた}に淡^{あか}紅^かき、白^{しろ}き、
 とりどりの石^{いし}の柱^{はしら}ありて倚^よりしを、
 花^{はな}束^{たば}と、没^{もつ}薬^{やく}と、黄^{わう}金^{こん}の枝^{えだ}の果^{くだ}物^{もの}と、
 我^わが水^{みづ}鏡^{かがみ}する青^{せい}玉^{ぎよ}の泉^{いづみ}と、
 また我^われに接^{くわ}吻^くけて羽^はばたく白^{しろ}鳥^{とり}と、

其^{その}等^らみな我^われの傍^{かた}を離^{はな}れざりしを。

あな、あはれ、我^わが被^め眼^か布^しは落^おちぬ。

天^{あま}地^{つち}は忽^{たち}ちに状^{さま}變^{かは}り、

うすぐらき中^{なか}に我^われ立^たつ。

こは既^{すで}に日^ひの入^いりはてしか、

夜^よのまだ明^あけざるか、

はた、とこしへに光^{ひかり}なく、音^ねなく、

望^{のぞ}みなく、

唯^{ただ}だ大^{おほ}なる陰^{かげ}影^{かげ}のたなびく國^{くに}なるか。

否とよ、思へば、
これや我が目の俄かにも盲ひしならめ。

古き世界は古きままに、

日は眞赤なる空を渡り、

花は緑の枝に咲きみだれ、

人は皆春のさかりに

鳥のごとく歌ひ交し、

うま酒は盃より滴れど、

我れ一人そを見ざるにやあらん。

否とよ、また思へば、幸ひは

かの肉色の被眼布にこそありけれ、

いてや再びそれを結ばん。

我れは戦く身を屈めて

闇の底に冷たき手をさし伸ぶ。

あな、悲し、わが推しあての手探りに、
肉色の被眼布は觸るる由もなし。

とゆき、かくゆき、徘徊る此處は何處ぞ、

かき曇りたる我が目にも其れと知るは、

永き夜の土を一際黒く壓す
静かに寂しき扁柏の森の蔭なるらし。

装
幀
畫

カ
ツ
ト

挿
畫

藤島武二氏

リュクサンブル公園の噴水

麝香撫子

セエヌ川の小雨

落葉

附錄 著者習作二畫

フオンテンプロウの白樺

モンサウ公園

大正二年十二月廿一日印刷
大正三年一月一日發行

著作權
所有

(金子製本)

金壹圓八拾錢

著者 與謝野晶子

東京市麴町區平河町五丁目五番地

發行者 金尾種次郎

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷者 佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市麴町區平河町五丁目五番地

發兌元

金尾文淵堂

(特選東京番町二〇九三番番)

類書藝文刊新堂淵文

與謝野晶子氏作

□ 新譯源氏物語	上卷中卷 下卷二册	一特 册價	金貳圓五拾錢
□ 春泥集	全		金壹圓
□ 佐保姫	全		金壹圓
□ 一隅よ	全		金壹圓貳拾錢
□ 夏より秋へ	全		金壹圓八拾錢
□ 明るみへ	全		近刊
□ 寂しき人々	全		金壹圓
□ 故郷(マグダ)	全		金九拾錢
□ 三千里	全	特價	金貳圓五拾錢
□ 續三千里	上卷下卷	特價	各金貳圓
□ 生靈	全		金壹圓

正宗白鳥氏作

河東碧梧桐氏著

ズーダーマン氏原作
鳥村抱月氏譯補

ハプトマン氏原作
森鷗外氏譯

類書藝文刊新堂淵文

菊池 幽芳氏作	柳川 春葉氏作	佐藤 紅綠氏作
□百合子	□清繪葉書百合子	□礎
前編後編	□清百合子畫集	□富
中編	□秘中の秘	□花賣
一册	□月魄	□女一代
金壹圓拾錢	□生さぬなか	□母
前編後編	□續生さぬなか	上卷下卷
一册	上卷中卷	一册
金壹圓	下卷後編	金九拾五錢
前編後編	上卷	金九拾五錢
一册	前編後編	金壹圓
金壹圓	上卷下卷	金壹圓貳拾錢
前編後編	全	金壹圓
一册	全	金九拾五錢
金壹圓	前編後編	
前編後編	前編後編	
一册	前編後編	
金九拾五錢	前編後編	

